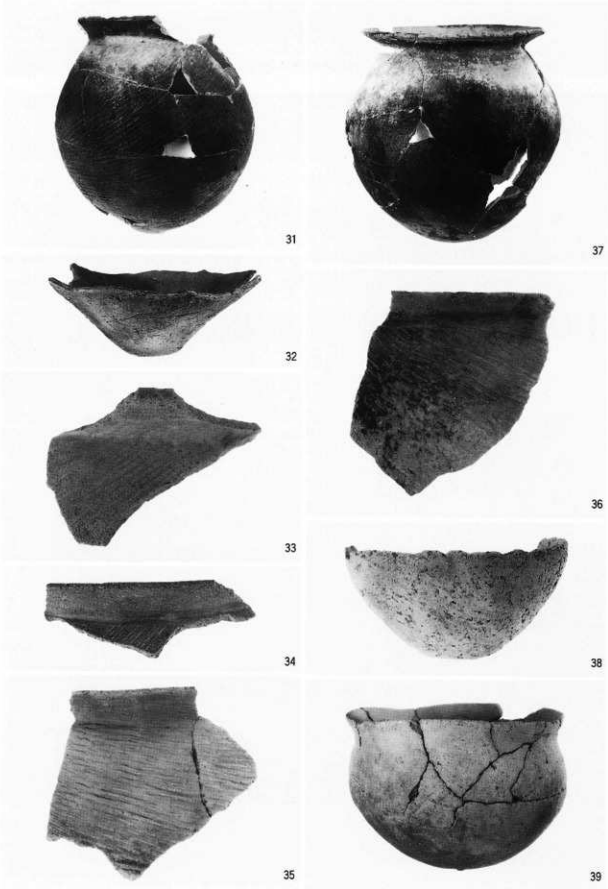


SK－2（31～39）出土遺物

40

41

43

45

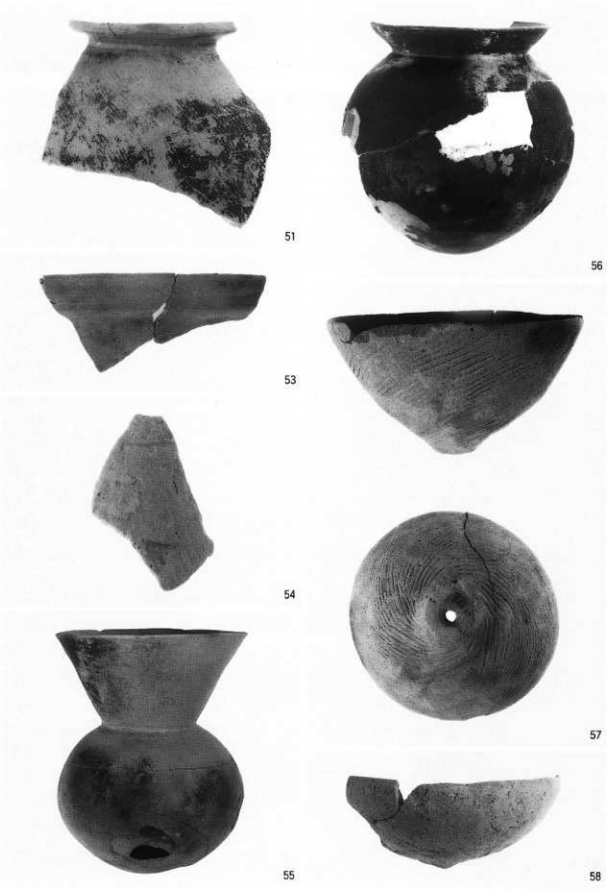
46

47

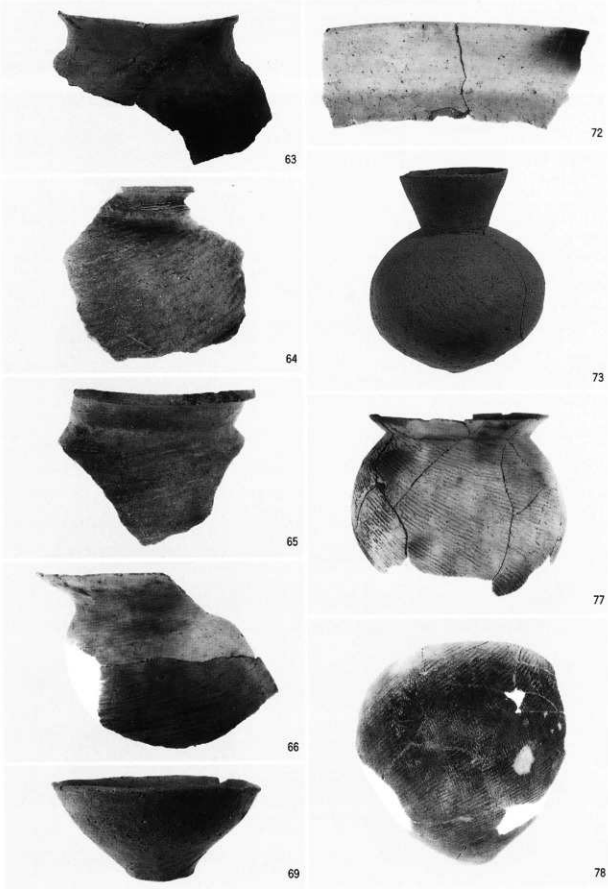
48

49

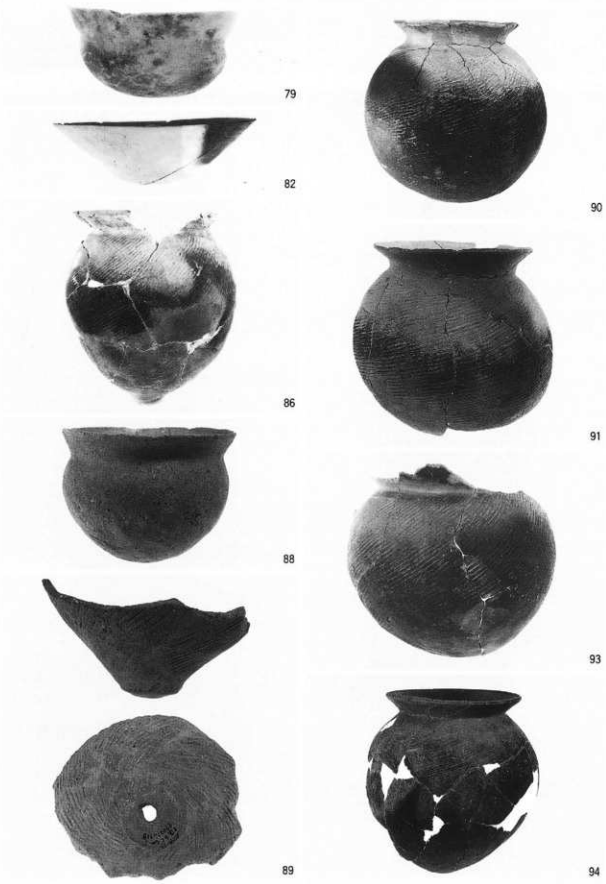
SK－2（40・41・43・45～49）出土遺物



ＳＫ－３（51・53・54）、ＳＫ－４（56）、ＳＫ－６（55・58）、ＳＫ－７（57）出土遺物



ＳＫ－８（63～66・69）、ＳＫ－９（72）、ＳＫ－12（73・77・78）出土遺物



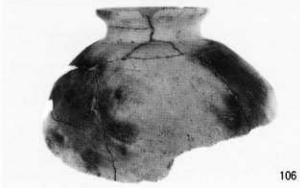
SK－13（79・82・86）、SW－1（88～91・93・94）出土遺物

102

103

104

105


106

109

112

113

116

119

SD－3（102～106・109・112・113・116・119）出土遺物

121

122

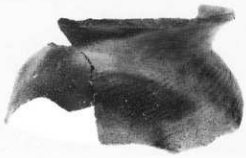
123

124

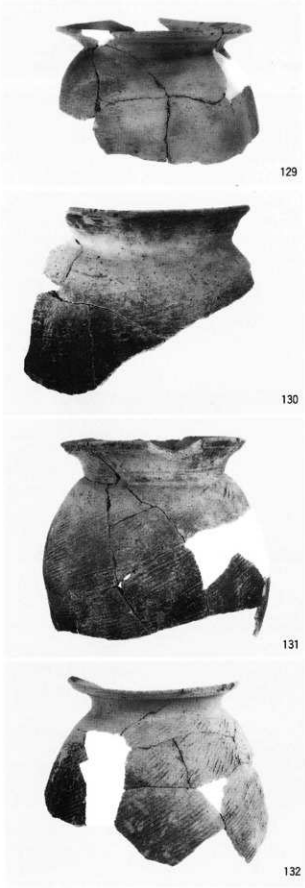
125

126

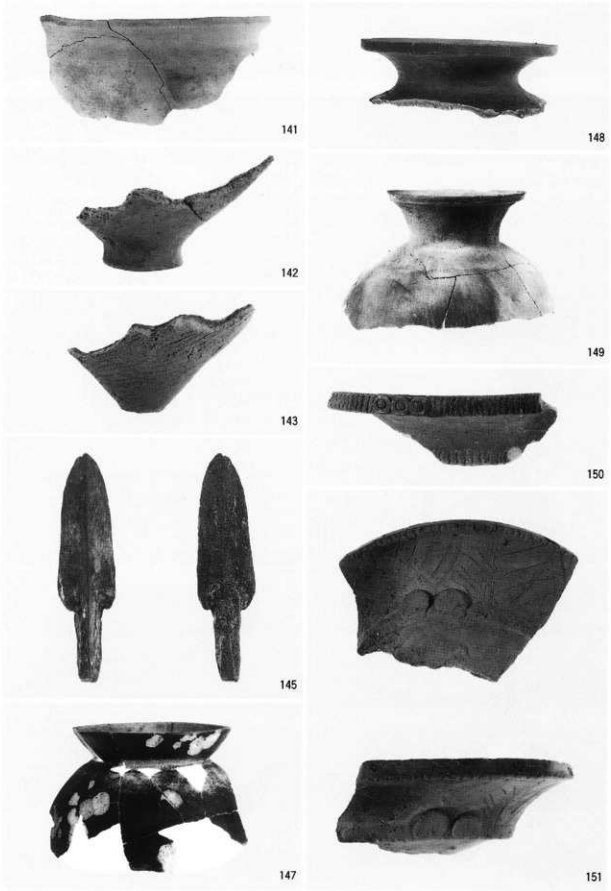
127


128

ＳＤ－３（121～128）出土遺物



SD－3（129～133・135・137・138・140）出土遺物



SD－3（141～143・145）、SD－10（147）
第9層（148～151）出土遺物

152

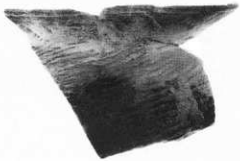
156

153

157

154

158


155

160

第９層（152～158・160）出土遺物

162

164

165

166

167

169

170

171

第9層（162・164～167・169～171）出土遺物

Ⅲ　老原遺跡第６次調査（ＯＨ95－６）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市老原１丁目地内で実施した道路新設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1．本書で報告する老原遺跡第６次調査（ＯＨ95－６）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋266-３号　平成７年10月４日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は平成７年12月４日から平成７年12月21日（実働14日間）にかけて原田昌則を担当者として実施した。面積約150㎡を測る。
　現地調査においては、垣内洋平・岸田靖子・中西明美・西村和子・辻野優子が参加した。
1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成16年９月30日に完了した。
1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－伊藤静江・板野行仲・岩沢玲子・垣内・北原清子・永井律子・村井俊子・村田知子・山内千恵子、図面トレース－村井、遺物写真撮影－原田が行った。
1．本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 61
第２章　調査概要 …… 62
　第１節　調査の方法と経過 …… 62
　第２節　基本層序 …… 63
　第３節　検出遺構と出土遺物 …… 63
　　１）検出遺構 …… 63
　　２）遺構に伴わない出土遺物 …… 74
第３章　まとめ …… 75

挿図目次

第1図　調査地周辺図 …… 61
第2図　調査地設定図および地区割図 …… 62
第3図　検出遺構平断面図 …… 64
第4図　SD－1、SD－2出土遺物実測図 …… 65
第5図　SD－3出土遺物実測図 …… 66
第6図　SD－4出土遺物実測図 …… 67
第7図　SD－5出土遺物実測図 …… 67
第8図　SD－6断面図 …… 68
第9図　SD－6出土遺物実測図 …… 69
第10図　SD－7断面図 …… 69
第11図　SD－7出土遺物実測図 …… 70
第12図　石組み溝－1平断面図 …… 72
第13図　石組み溝－1出土遺物実測図 …… 73
第14図　第3層、第6層出土遺物実測図 …… 74

写真目次

写真1　SE－1検出状況 …… 63

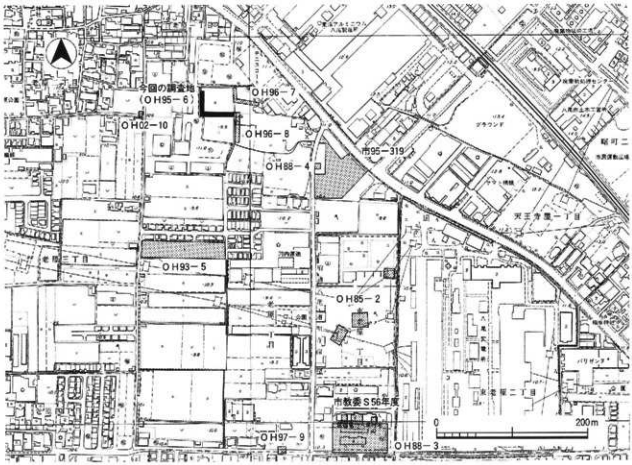
図版目次

図版一　南北調査区全景
　　東西調査区全景
図版二　SE－1、SK－1・2、
　　SP－1検出状況
　　SK－3、SP－2検出状況
　　SP－2検出状況
図版三　石組み溝－1検出状況
　　同　上　完掘状況
　　石組み溝－1、SD－7検出状況
図版四　SD－3、SD－4、SD－5
　　出土遺物
図版五　SD－6出土遺物
図版六　SD－6、SD－7出土遺物
図版七　SD－7出土遺物
図版八　石組み溝－1、第3層出土遺物
図版九　第3層出土遺物

第１章　はじめに

老原遺跡は八尾市中南部の老原１・２丁目、東老原１丁目に広がる古墳時代後期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。地理的には旧大和川の主流である長瀬川左岸一帯の標高10m前後付近を中心に展開している。

当遺跡周辺には、南に志紀遺跡・田井中遺跡、さらに長瀬川を挟んで東に東弓削遺跡、北に矢作遺跡、北東に中田遺跡が存在している。当遺跡内においては、昭和56年度に東老原１丁目で八尾市教育委員会が発掘調査を実施したのを端緒として、昭和60年度以降は当調査研究会・市教育委員会により10次におよぶ調査が実施されており、古墳時代後期から室町時代に至る遺構・遺物が検出されている。特に遺跡推定範囲の北部に位置する老原１丁目地内一帯では当調査研究会による第２次調査（ＯＨ85－２）、第４次調査（ＯＨ88－４）、第５次調査（ＯＨ93－５）、および市教育委員会による95－319調査等が実施されており、平安時代末期から鎌倉時代初頭を中心とする居住域の広がりが確認されている。今回の調査地は上記の調査地と近接する他、南東約70m地点の田地内には一辺が５m程度の規模を持つ「五条宮」と称される塚が存在している。「五条宮」については「八尾市史」等で奈良時代後期の軒丸瓦が出土したことが一部報ぜられている以外は不明な点が多く、今回の調査はその点においても注目される地点の調査であった。

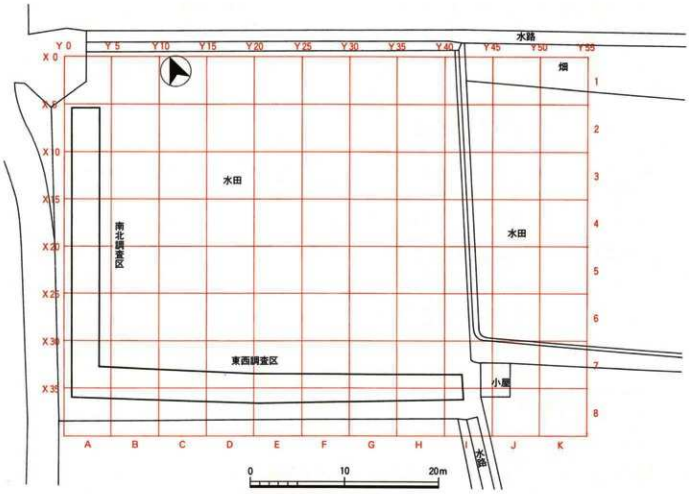


第１図　調査地周辺図

第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の調査は平成７年度～平成９年度にかけて老原１丁目地内で計画された道路新設工事に伴う発掘調査で、本調査がその初年度にあたる。調査ではＬ字状に屈曲する新設道路予定地に沿って上幅で2.9m（下幅2.2m）、長さ延べ68mの調査区を設定した。調査面積は約150㎡を測る。調査地の地区割りについては、本事業が平成７年度～平成９年度にかけて３年間継続する計画であったことから、それらに対応するため本年度調査地の北西隅にＸ０・Ｙ０の基点を設け、そこより東西軸、南北軸で区画される一区画５m四方の地区を設定した。本調査分では東西45m、南北40mを区画し、東西方向はアルファベット（西からＡ～Ｉ）、南北方向は算用数字（北から１～８）で示し、地区の表示は１Ａ地区～８Ｉ地区と呼称した。地点の表示には、東西線（Ｘ０～X40）・南北線（Ｙ０～Y45）の交点の数値を使用した。掘削に際しては、現地表下約0.9mまでを機械掘削した後、以下0.2~0.3mについては人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。調査の結果、現地表下1.1m前後（標高7.9m前後）に存在する第７層上面で平安時代後期～鎌倉時代初頭の土坑３基（ＳＫ－１～ＳＫ－３）、溝５条（ＳＤ－１～ＳＤ－３・ＳＤ－５・ＳＤ－６）、小穴１個



第2図　調査地設定図および地区割図

（ＳＰ－２）、室町時代中期の溝２条（ＳＤ－４・ＳＤ－７）を検出した他、第２・３層上面では江戸時代中期の井戸１基（ＳＥ－１）、石組み溝１条（石組み溝－１）を検出した。遺物は遺構内および第６層を中心に平安時代後期～江戸時代中期に比定される土器類、木製品、石製品等がコンテナ６箱程度出土している。

第２節　基本層序

調査地点の現状は水田であり、現作土以下の堆積土層が観察できた。第１層の現作土以下、第４層に至るまで、砂質シルトが優勢な堆積土層である。第５層・第６層は粘土質シルトを主としており、第６層が鎌倉時代初頭～前期の遺物包含層である。第７層は明緑灰色の色調で極細粒砂～細粒砂を主とする水成層で、上面が平安時代末～鎌倉時代初頭の生活面である。第７層以下は、細粒砂と粘土の互層で、河川氾濫に起因した堆積状況が認められる。ここでは、普遍的に存在した８層を摘出して基本層序とした。

第１層　5Y5/1灰色砂質シルト。現作土。層厚0.2m。上面の標高はT.P.＋9.0mである。
第２a層　5Y5/3浅黄色砂質シルト。床土。層厚0.05～0.1m。酸化鉄・マンガンが斑点状に沈着している。
第２b層　2.5GY7/1明オリーブ灰色シルト。床土。層厚0.15～0.25m。酸化鉄・マンガンが斑点状に沈着している。細礫を含む。
第３層　10YR6/1褐灰色砂質シルト。層厚0.1～0.3m。室町時代の遺構構築面。
第４層　10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルト。層厚0.1～0.25m。
第５層　5Y5/1灰色粘土質シルト。層厚0.1～0.2m。
第６層　N5/0灰色粘土質シルト。層厚0.2m。平安時代末期～鎌倉時代前期の遺物を含む。
第７層　7.5GY8/1明緑灰色極細粒砂～細粒砂。層厚0.3m以上。平安時代末期～鎌倉時代初頭の遺構構築面。

第３節　検出遺構と出土遺物

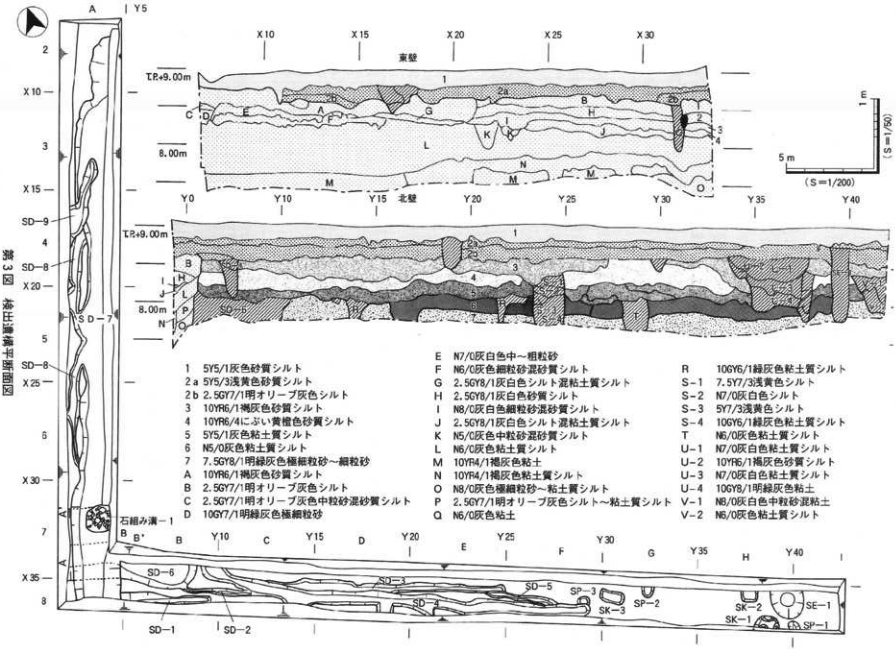
１）検出遺構

井戸（ＳＥ）

ＳＥ－１

８Ｈ・Ｉ地区で検出した。上部は削平を受けており、全容は不明であるが下部に桶井戸側を使用し、上部に瓦井戸側を積む農耕用井戸で、河内一浩氏による近世農耕井戸分類（河内1992）のⅢ類にあたる。各井戸側は土圧による歪みが顕著で、上面の形状も楕円形に変形していた。検出部分で径0.72～0.75mを測るもので、深さについては1.25mまで確認したが、以下については崩壊する危険性が危惧されたため確認できなかった。下部の桶井戸側は径0.7m前後、高さ

写真１　ＳＥ－１検出状況（北から）



1 5Y5/1灰色砂質シルト
2a 5Y5/3浅黄色砂質シルト
2b 2.5GY7/1明オリーブ灰色シルト
3 10YR6/1褐灰色砂質シルト
4 10YR6/4にぶい黄橙色砂質シルト
5 5Y5/1灰色粘土質シルト
6 N5/0灰色粘土質シルト
7 7.5GY8/1明緑灰色極細粒砂～細粒砂
A 10YR6/1褐灰色砂質シルト
B 2.5GY7/1明オリーブ灰色シルト
C 2.5GY7/1明オリーブ灰色中粒砂混砂質シルト
D 10GY7/1明緑灰色極細粒砂
E N7/0灰白色中～粗粒砂
F N6/0灰色細粒砂混砂質シルト
G 2.5GY8/1灰白色シルト混粘土質シルト
H 2.5GY8/1灰白色砂質シルト
I N8/0灰白色細粒砂混砂質シルト
J 2.5GY8/1灰白色シルト混粘土質シルト
K N5/0灰色中粒砂混砂質シルト
L N6/0灰色粘土質シルト
M 10YR4/1褐灰色粘土
N 10YR4/1褐灰色粘土質シルト
O N8/0灰色極細粒砂～粘土質シルト
P 2.5GY7/1明オリーブ灰色シルト～粘土質シルト
Q N6/0灰色粘土
R 10GY6/1緑灰色粘土質シルト
S-1 7.5Y7/3浅黄色シルト
S-2 N7/0灰白色シルト
S-3 5Y7/3浅黄色シルト
S-4 10GY6/1緑灰色粘土質シルト
T N6/0灰色粘土質シルト
U-1 N7/0灰白色粘土質シルト
U-2 10YR6/1褐灰色砂質シルト
U-3 N7/0灰白色粘土質シルト
U-4 10GY8/1明緑灰色粘土
V-1 N8/0灰白色中粒砂混粘土
V-2 N6/0灰色粘土質シルト

第33図 特別養護老人ホーム建設地点

0.6m前後を測る桶を２段積み重ねている。上部の瓦井戸側は井戸側用瓦（幅26cm・高さ28cm・厚さ３cm）を９枚使用して一周させるもので、検出時点では２段を確認したが、井戸内からも別の井戸側用瓦が出土していることから、本来は４段積みであった可能性が高く、構築面についても第２層上面付近が想定される。埋土はN3/0暗灰色粘土質シルトである。遺物は井戸側用瓦のほか瓦質土管等が出土している。構築時期は江戸時代中期以降が推定されよう。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

８Ｈ地区で検出した。南部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.29m、南北幅0.7m、深さ0.28mを測るもので、底部に小穴状の窪みが３ケ所認められる。埋土は上層のN5/0灰色粘土質シルトと下層の10YR4/1褐灰色粘土質シルトの２層から成る。遺物は土師器小皿、須恵器甕、平瓦等の小破片が極少量出土しているが図化し得たものはない。

ＳＫ－２

ＳＫ－１の北西に隣接している。北部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.88m、南北幅0.5m、深さ0.11mを測るもので、底部はほぼ水平である。埋土は10GY6/1緑灰色砂質シルトの単一層である。遺物は土師器小皿、瓦器椀、屋瓦等の小破片が極少量出土しているが図化し得たものはない。

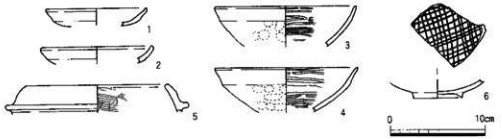
ＳＫ－３

８Ｆ・Ｇ地区で検出した。長方形を呈するもので、東西長1.2m、南北長0.55m、深さ0.09mを測る。埋土は10GY6/1緑灰色砂質シルトの単一層である。遺物は土師器小皿の小破片が極少量出土しているが図化し得たものはない。

溝（ＳＤ）

ＳＤ－１

８Ａ～８Ｂ地区の南部で検出した。東西方向に伸びるもので、南肩は調査外に至り不明のほか、西端はＳＤ－７により切られている。検出部分で、検出長4.9m、幅0.3m、深さ0.17mを測る。埋土は10YR5/1褐灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は平安時代末期に比定される土師器小皿・土釜、瓦器椀の小片が少量出土している。５点（１～５）を図化した。１・２は土師器小皿の小破片である。口縁部が斜上方に直線的に伸びる１と内湾気味に伸びる２がある。３・４は和泉型瓦器椀の体部片である。復元口径は３が14.8cm、４が14.9cmを測る。体部は内面が共に横位のヘラミガキ、外面は口縁部がヨコナデ、以下は指頭圧痕を残す。共に型式的には尾上編年（尾



第４図　ＳＤ－１（１～５）、ＳＤ－２（６）出土遺物実測図

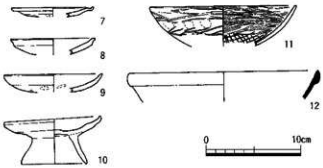
上1983）のⅢ－１期、年代観については森島編年（森島1992）により12世紀後半が考えられる。５は土師器焼成であるが形態からみて瓦器足釜と推定される。復元口径15.0cm、鍔径19.4cmを測る。出土遺物から遺構の廃絶時期は平安時代末期（12世紀後半）が推定される。

ＳＤ－２

８Ｂ～８Ｃ地区にかけて東西方向に直線的に伸びるもので、西端でＳＤ－６と合流し、東端でＳＤ－４に切られている。検出長3.6m、幅0.3m、深さ0.11mを測る。埋土は10GY7/1明緑灰色粘土質シルトである。遺物は平安時代末期（12世紀後半）に比定される瓦器椀の小破片が極少量出土している。瓦器椀１点（６）を図化した。和泉型瓦器椀の底部で高台径5.1cm、高台高0.5cmを測る。見込みのヘラミガキは格子状である。尾上編年のⅡ－３期（12世後半）に比定される。出土遺物から遺構の廃絶時期は平安時代末期（12世紀後半）が推定される。

ＳＤ－３

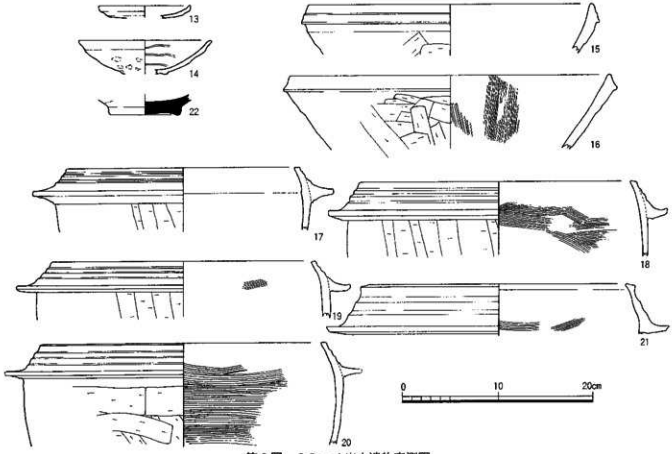
８Ｃ～８Ｅ地区にかけて東西方向に直線的に伸びるもので、東端はＳＤ－５に切られ、西部では南肩をＳＤ－４に切られている。検出長12.6m、幅0.43m、深さ0.14mを測る。埋土は上層が10GY7/1明緑灰色極細粒砂、下層が植物遺体を含む10YR5/1褐灰色シルトである。遺物は平安時代後期（12世紀前半）に比定される土師器小皿・台付き小皿、瓦器椀、白磁碗等が極少量出土している。６点（７～12）を図化した。７～９は土師器小皿である。７・８が小破片、９が1/2残存している。７は「て」の字状口縁を呈するもので復元口径8.7cm、器高1.0cmを測る。８・９は共に口縁部が斜上方に伸びるもので小さく外反する８と直口の９がある。色調は７・９が灰白色、８が淡褐灰色である。10は「ハ」の字形に開く高台部が付く高台付皿でほぼ完形である。口径10.3cm、器高4.8cmを測る。色調は淡褐灰色。11は和泉型の瓦器椀で高台を欠く。復元口径15.3cmを測る。体部のヘラミガキは内面が横位で密、外面は中位より上に横位に粗く施す。見込みは格子状ヘラミガキを施す。尾上編年のⅡ－１期（12世紀前半）に比定される。12は玉縁を有する白磁碗の小破片である。森田・横田分類（森田・横田1978）の碗Ⅳ１ａ（11世紀後半～12世紀前半）に比定される。出土した瓦器椀の年代観から遺構の廃絶時期は平安時代後期（12世紀前半）が推定される。



第５図　ＳＤ－３出土遺物実測図

ＳＤ－４

７Ｂ～８Ｆ地区にかけて東西方向に伸び、西端で屈曲して北に流路を変えるもので、ＳＤ－２・ＳＤ－３・ＳＤ－５の一部を切っている。検出長20m、幅0.5～0.7m、深さ0.25mを測る。埋土は粘土質シルトから極細粒砂で構成される３層から成る。遺物は一部の夾雑遺物を除けば室町時代中期（15世紀前半）を中心とする土器類が少量出土している。遺物からみて本来の構築面は第４層上面が推定される。10点（13～22）を図化した。13は土師器小皿の小破片である。復元口径9.5cmを測る。色調は淡灰褐色である。14は浅い椀形の体部に形骸化した高台が付く瓦器椀である。復元口径14.0cm、器高3.5cmを測る。体部内面のヘラミガキは３周程度が認められる。尾上編年の

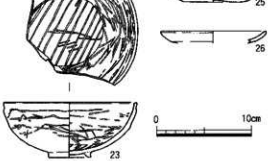


第６図　ＳＤ－４出土遺物実測図

Ⅳ－１期（13世紀中葉）にあたる。15・16は瓦質摺鉢の小破片である。復元口径は15が29.6cm、16が33.5cmを測る。共に体部外面には乱方向のヘラケズリが施されている。16の擂目は10本/２cmである。15世紀代。瓦質土釜は５点（17～21）図化した。水平方向に付く鍔部から口縁部が外傾して３段の段を有して伸びるもので端部は水平な面を呈する。体部外面は横位のヘラケズリ、内面は17を除いてハケ調整が行なわれている。17～20が森島編年のＥ型式（15世紀前半）、21がＦ型式（15世紀前半）である。22は白磁碗の底部である。横田・森田編年の白磁碗Ⅳ１ａ（11世紀後半～12世紀前半）に比定される。出土遺物には時期幅があるが廃絶時期としては室町時代中期（15世紀前半）が推定される。

ＳＤ－５

８Ｅ～８Ｆ地区かけて東西方向に伸びるもので、西端でＳＤ－３を切り、東端でＳＤ－４に切られている。検出長3.8m、幅0.2m、深さ0.07mを測る。埋土は10GY8/1明緑灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は平安時代末期（12世紀後半）の土師器小皿、瓦器椀の小破片が少量出土している。４点（23～26）を図化した。23は和泉型の瓦器椀で1/2以上が残存している。口径13.9cm、器高6.0cmを測る。



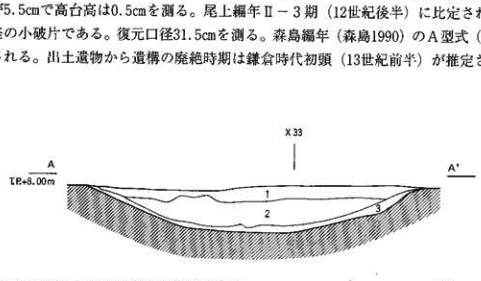
第７図　ＳＤ－５出土遺物実測図

高台は完存しており、高台径4.4cm、高台高0.5cmを測る。高台畳面に乾燥時に生じた縦方向の亀裂が7箇所に確認できる。体部内外面のヘラミガキは横位に粗く施す。見込みのヘラミガキは平行線状を施す。尾上編年のⅡ－2期（12世紀後半）に比定される。24～26は土師器小皿である。25が完形、24・26が小片である。25は口径9.6cm、器高1.3cmを測る。色調は24が灰白色、25が淡褐灰色、26が淡灰褐色である。25の内面に灯芯油痕が残る。出土遺物から遺構の廃絶時期は平安時代末期（12世紀後半）が推定される。

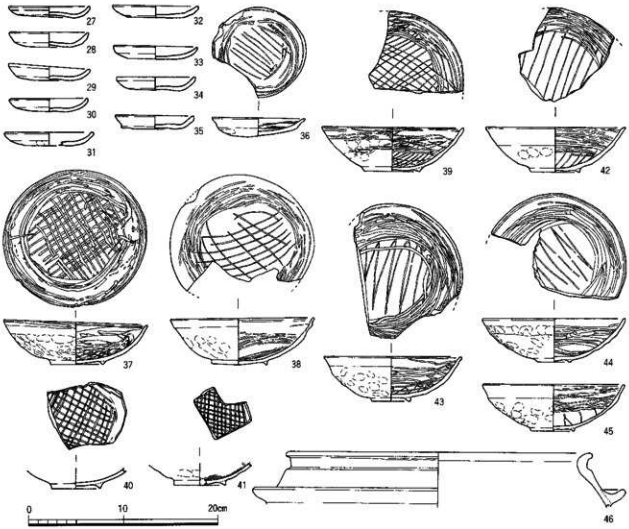
ＳＤ－６

７Ａ～７・８Ｂ地区にかけて検出した。西部では上部がＳＤ－７により削平されており、西端でわずかに両肩が検出されているにすぎない。検出した状況からみて、７Ｂ地区付近で屈曲してさらに北方に伸びるようである。検出長７m、幅3.65m、深さ0.45mを測る。断面形状は浅い椀状を呈する。埋土は断面形状に沿って粘土質シルトを主体とする３層が堆積している。

遺物は平安時代末期～鎌倉時代前期（12世紀後半～13世紀初頭）に比定される土師器小皿・土釜、瓦器椀が出土している。20点（27～46）を図化した。27～35は土師器小皿である。29・33・35は完形である。上げ底ないしは水平な底部から口縁部が斜上方に小さく伸びる形態で口縁端部は尖り気味ないしは丸味をもって終る。口径8.0～9.5cm、器高1.4～1.5cmを測る。色調は淡灰褐色系である。36は瓦器小皿である。口径9.6cm、器高2.0cmを測る。体部内面は粗いヘラミガキ、見込みに平行線状ヘラミガキを施す。時期的には12世後半に比定される。37～45は和泉型瓦器椀である。そのうち図上で完形に復元可能なものは７点（37～39、42～45）である。法量は口径14.5～15.0cm、器高4.2～5.0cmを測る。体部外面のヘラミガキは口縁部付近が中心に行われているもの37・39の他は認められない。体部内面のヘラミガキはやや粗めで37についてはヘラミガキが錯綜しており個々の単位は不明瞭である。見込みのヘラミガキは37～39が格子状、42が平行線状、43～45がジグザグ状である。尾上編年のⅡ－３期～Ⅲ－２期（12世紀後半～13世紀前半）に比定される。40・41は底部のみの残存で見込みには格子状ヘラミガキを施す。高台径は40が5.0cm、41が5.5cmで高台高は0.5cmを測る。尾上編年Ⅱ－３期（12世紀後半）に比定される。46は土師器土釜の小破片である。復元口径31.5cmを測る。森島編年（森島1990）のＡ型式（13世紀前半）に比定される。出土遺物から遺構の廃絶時期は鎌倉時代初頭（13世紀前半）が推定される。



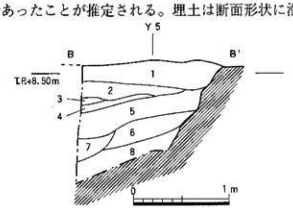
第８図　ＳＤ－６断面図



第９図　ＳＤ－６出土遺物実測図

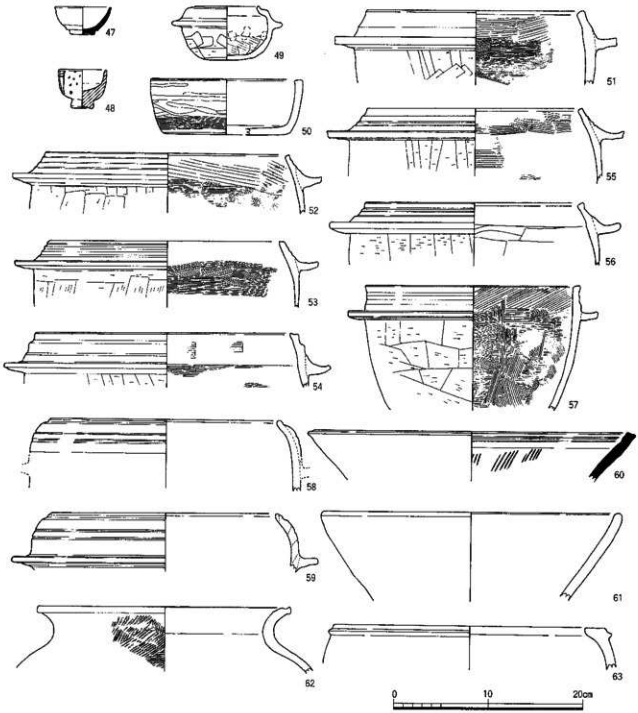
ＳＤ－７

南北方向に設定した調査区の東部に沿って伸びるもので、ＳＤ－６・ＳＤ－８・ＳＤ－９を切っている。調査では第７層上面で検出したが本来の構築面は３層上面である。検出長は29.9mを測る。溝幅や深さについては、断面部分から幅３m、深さ1.3m前後の規模で、溝幅に比してやや深めの形状であったことが推定される。埋土は断面形状に沿って８層からなるもので、下部層は



1　2.5GY7/1明オリーブ灰色シルト
2　2.5GY8/1灰白色砂質シルト
3　N8/0灰白色細粒砂混砂質土
4　2.5GY8/1灰白色シルト混粘土
5　N6/0灰色粘土質シルト
6　2.5GY7/1明オリーブ灰色シルト～粘土
7　10YR4/1褐灰色粘土質シルト
8　N8/0灰白色極細粒砂～粘土質シルト

第10図　ＳＤ－７断面図



第11図　ＳＤ－７出土遺物実測図

やや不均質な粘土質シルトである。遺物は室町時代中期～後半を中心とする土師器摺鉢、瓦質土釜・火鉢・摺鉢・甕、陶器碗、屋瓦類、漆器椀等が出土している。17点（47～63）を図化した。47は美濃焼の小形の天目碗である。口径5.9cm、器高2.9cm、高台径2.5cmを測る。体部内面から体部外面下半にかけて鉄釉が施釉されている。48は小形の木製椀である。口径4.8cm、器高4.1cm、高台径2.3cmを測る。内外面の装飾文様については、木地に直接行われている。体部外面は墨書による梅鉢文を３箇所とその間に赤色顔料による草花文が表現されているが欠損部分が不明のほか

全体に不鮮明でその意匠は明確でない。その他、赤色顔料により見込みに二重の円形文と口縁端部に彩色が施されている。49は小形の瓦質土釜である。完形品で口径6.5cm、器高5.6cm、鍔径11.5cmを測る。茶釜の形態を模倣したもので、底部に黒色に変色した部分があることから、火にかけて使用したようである。50は瓦質の平底鉢である。口径15.8cm、器高6.0cmを測る。51～56は瓦質土釜である。水平方向に伸びる鍔部から外傾して口縁部が伸びる。口縁部は無段の51と３段の52・53・55・56がある。口縁端面は内傾する51・52・55・56、水平な53、僅かに窪む54がある。体部外面のヘラケズリは横位ないしは縦位に施されている。口縁部内面および体部内面は横位のハケ調整が51～55、ナデ調整が56である。52・53・55・56は森島編年のＥ型式（15世紀前半）に比定される。54は外傾する口縁部外面に２段の段を形成するもので森島編年のＦ型式（15世紀後半）にあたる。57は土師器土釜である。短く水平方向に貼り付けられた鍔部から口頸部が直上方に伸びるもので、端面は内傾している。口頸部外面に２段の段を有するが明瞭でない。内面は口頸部が右上りのハケ、以下は横方向の後、縦方向のハケを施す。体部外面は横方向のヘラケズリを施す。色調は赤褐色。森島編年のＨ型式（16世紀前半）にあたる。58・59は内湾する口縁部の外面に２条の沈線を持つ瓦質土釜で森島編年のＩ型式（15世紀後半）にあたる。60は丹波焼の擂鉢である。16世紀後半～17世紀前半に比定される。61は瓦質擂鉢の小破片である。復元口径30.7cmを測る。口縁端部が丸く終るもので、大和地方を中心に分布するものである。15世紀前半に比定される。62は外反する口縁部を有する瓦質の甕である。外面の口縁部から体部にタタキ調整が施されている。13世紀代のものか。63は瓦質の浅鉢である。いわゆる「奈良火鉢」に分類されるもので立石堅志編年（立石1995）の浅鉢Ⅳないしは Ⅴにあたる。14世紀後半に比定される。遺構の廃絶時期としては室町時代後期（16世紀前半）が推定される。

ＳＤ－８

４Ａ～６Ａ地区にかけてゆるやかに蛇行しながら南北方向に伸びるもので、北端がＳＤ－９、東肩と南端はＳＤ－７により切られている。検出長12.4m、幅0.15～0.6m、深さ0.1mを測る。埋土はN4/0灰色細粒砂混粘土質シルトである。遺物は出土していない。

ＳＤ－９

３・４Ａ地区で検出した。北東－南西方向に伸びるもので、ＳＤ－７・８を切っている。検出長4.7m、幅0.4～2.2m、深さ0.45mを測る。埋土は10GY7/1明緑灰色シルトである。遺物は出土していない。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－１

８Ｈ・Ｉ地区で検出した。南部が調査区外に至るがほぼ楕円形を呈するものと推定される。検出部分で東西幅0.55m、南北幅0.42m、深さ0.26mを測る。埋土は10GY6/1緑灰色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

ＳＰ－２

８Ｇ地区で検出した。北部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.64m、南北幅0.60m、深さ0.16mを測る。埋土は上層の10GY6/1緑灰色砂質シルトと下層の10GY8/1明緑灰色粘土がほぼ水平に堆積している。遺物は鎌倉時代初頭（13世紀前半）の土師器小皿、瓦器椀

等の小破片が極少量出土しているが図化したものはない。

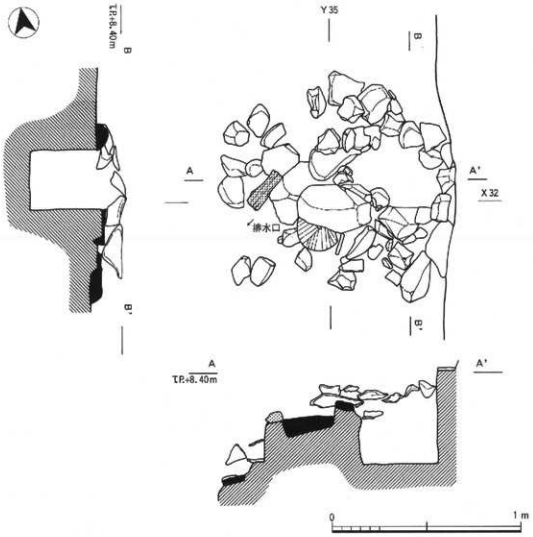
ＳＰ－３

８Ｆ地区で検出した。南部がＳＤ－４に切られているが、本来は東西方向に長い楕円形を呈するものと推定される。検出部分で東西幅0.63m、南北幅0.3m、深さ0.06mを測る。埋土は10GY6/1緑灰色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

石組み溝（石組み溝）

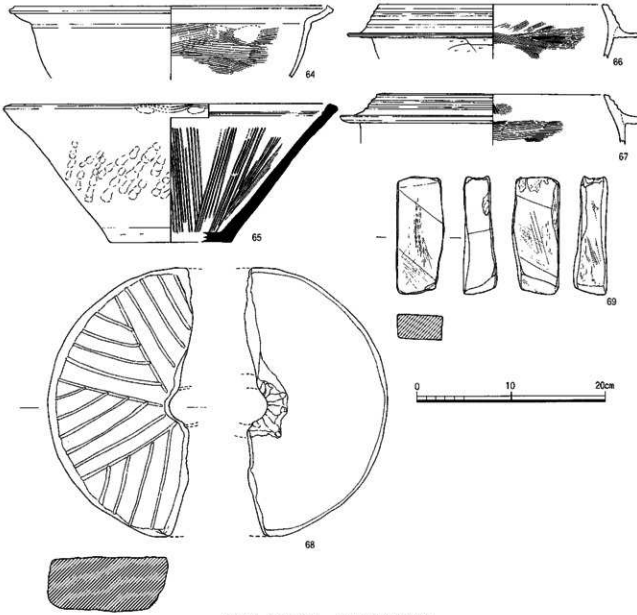
石組み溝－１

７Ａ地区で検出した。東部が調査区外に至るため不明な点が多いが、検出部分では拳大から0.2×0.4m程度を測る河原石の他、石臼・屋瓦・土器片を使用して楕円形に構築されており、規模は東西幅0.45m、南北幅0.37m、深さ0.4m前後を測る。石組の構築は雑で規則性は無く、東部では１段、西部では比較的大型の石材が２段に組まれている。機能的には、取水升的な役割が想定でき、東から引水した後、西側に排水するものであったと推定される。位置的には、ＳＤ－７の上部にあたることから、同溝の埋没後に東西方向に伸びる小溝（東壁のQ層）に設置された施設と



第12図　石組み溝－１断面図

考えられる。遺物は鎌倉時代～江戸時代中期に至る雑多な遺物がコンテナ1/2程度出土している。６点（64～69）を図化した。64は土師器土釜の小破片である。復元口径33.1cmを測る。大和地方を中心に分布するもので16世紀後半に比定される。65は丹波焼の摺鉢である。復元口径33.5cm、底径13.0cmを測る。擂目は６本/1.7cmである。17世紀前半のものか。66・67は瓦質土釜である。共に水平方向に伸びる鍔部から口縁部が外傾して伸びる。口縁部は共に３段を有し、端面は水平な面を形成している。森島編年のＥ型式（15世紀前半）に比定される。68は挽き臼の下臼で中央部の孔を境に欠損している。復元径27.0cm、厚さ5.7cmを測る。上面の分画および溝類は不明。石材は花崗岩である。69は長方形を呈する砥石である。４面に使用面を認める。石材は粘板岩である。遺物の性格としては石組み溝に転用された２次使用の性格を持つ。図化した遺物については15世紀前半から17世紀前半のものであるが、その他に江戸時代中期の肥前系陶磁器類の小破片が10点程度出土している。帰属時期は江戸時代中期以降が推定される。

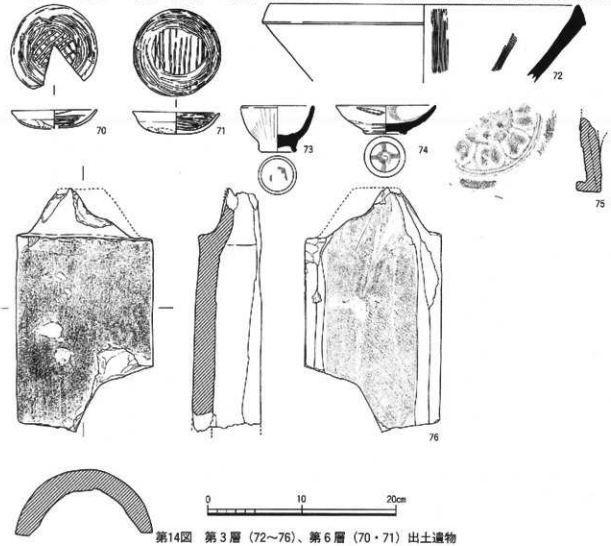


第13図　石組み溝－１出土遺物実測図

2）遺構に伴わない出土遺物

第3層、第6層出土遺物

第3層ならびに第6層から出土した7点（70～76）を図化した。第6層から出土したものは瓦器小皿2点（70・71）である。71が完形品である。法量は70が口径9.0cm、器高2.0cm、71が口径9.2cm、器高2.3cmを測る。見込みのヘラミガキは70が格子状、71が平行線状である。70が12世紀後半、71については70よりやや古い形態を示すものの口縁部外面のヘラミガキが行われていないことから70に近い時期が想定される。共に8E地区出土。第3層から出土したものは5点（72～76）である。72は備前焼の摺鉢である。復元口径32.5cmを測る。擂目は7条/2cm。色調は赤褐色である。間壁編年のⅣA期（14世紀後半～15世紀前半）に比定される。8E地区出土。73は青磁の小形碗で体部外面に蓮弁文を施文している。口径7.4cm、器高5.0cmを測る。全面にオリーブ灰色の釉を施釉後、高台畳付の釉を掻きとる。破面に漆が付着しており漆継ぎが行われたことを物語っている。高台裏面に文字か記号が墨書されているが判読できない。上田秀夫氏による編年（上田1982）では15世紀末に比定される。7H地区の北壁で存在を確認した第3層を構築面とする遺構内（U-3層）から出土。74は唐津焼の小皿で完形品である。口径10.2cm、器高3.0cm、底部径4.5cmを測る。内面に2本線の鉄絵と4箇所の胎土目が認められる。釉は厚めで高台部から体部中位



第14図　第3層（72～76）、第6層（70・71）出土遺物

を除く部位に施釉されている。釉色は灰緑色で細かい貫入が入るもので、体部外面上半に陶器片が溶着している。底部外面に墨書による「〆」の記号が記されている。17世紀前半に比定されるもので、出土位置が７Ａ地区であることから**石組み溝－１**に伴う可能性が高い。**75**は複弁８弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当面の約1/2が残存している。中房は隆起が低く径5.6cmを測る。蓮子は１＋５が推定される。花弁は複弁の８弁で花弁先端を繋げることにより間弁を表現している。外区に２条の圏線を飾る。外縁は高く素文の直立縁である。焼成はややあまく、色調は淡灰褐色である。本調査地を含む「五条宮」推定地内で確認された新たな軒丸瓦である。時期は平安時代後期が推定される。８ＧＨ地区出土。**76**は玉縁付き丸瓦である。凸面は縄タタキの後ナデ。凹面は糸切りによる緩弧線と布目が認められる。胴部凹面の側縁の面取りは幅が広い。鎌倉時代のものと推定される。８Ｅ地区出土。

参考文献
・河内一浩　1992「續・近世農耕井戸試考」『関西近世考古学研究Ⅲ』関西近世考古学研究会
・尾上　実　1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念論集　古文化論集』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会（和泉型瓦器椀の型式に使用）
・森島康雄　1992「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ』大和古中近研究会（和泉型瓦器椀の実年代に使用）
・横田賢次郎・森田　勉　1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集４』九州歴史資料館
・森島康雄　1990「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会
・上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』NO.２　日本貿易陶磁研究会
・間壁忠彦・間壁葭子　1966～68・84　「備前焼ノート」１～５　『倉敷考古館研究集報』１・２・５・18号
・立石堅志　1995「10.瓦質土器〔１〕奈良火鉢」『概説　中世の土器・陶磁器　中世土器研究会編』真陽社

第３章　まとめ

今回の調査は道路新設工事に伴う線的な調査ではあったが、平安時代後期～鎌倉時代初頭、室町時代後期、江戸時代中期に比定される３時期にわたる遺構・遺物を検出した。なお、当初調査地に近接する位置に奈良時代後期の軒丸瓦の出土が報ぜられている「五条宮」推定地が存在していることから、これらに関連した遺構・遺物の検出が想定された。調査の結果、遺物においては、新たに平安時代後半の軒丸瓦が１点（75）出土し、新たな知見を加えたものの、遺構・遺物に関しては奈良時代後期に遡るものは検出されていない。

以下、検出した遺構を時期毎に概観する。

・平安時代後期～鎌倉時代初頭

調査区全域にわたって遺構の分布が確認されているが、居住域の中核を成す土坑群や小穴群は東部に集中する傾向が高く、遺物包含層である第６層も東部を中心に形成されていることが指摘

される。当該期の遺構は、第２次調査（ＯＨ85－２）、第４次調査（ＯＨ88－４）、第５次調査（ＯＨ93－５）、老原（95－319）、第７次調査（ＯＨ96－７）で検出されており現時点では東西300m以上、南北350m以上の広範囲にわたる居住域の広がりが推定される。

・室町時代後期

この時期の遺構は溝２条（ＳＤ－４・ＳＤ－７）が検出されている。なかでも、南北方向に伸びるＳＤ－７は幅３m、深さ0.8mを測る比較的規模の大きいもので、下層部分の粘土質シルトの堆積は、絶えず滞水状態であったことを示している。これらの溝の性格としては、集落ないしは屋敷地を囲繞する堀の役割を果たしたものと推定され、この時期の調査地付近の集落形態を知る上で貴重な資料と言える。

・江戸時代中期

この時期の遺構としては、ＳＥ－１・**石組み溝－１**がある。ＳＥ－１は桶と井戸側用瓦で形成された井戸である。これらの形態をもつ井戸は、大和川付け替え以降の江戸時代中期以降、中河内地域全域で通有な農耕用の井戸と推定される。**石組み溝－１**は室町時代後期のＳＤ－７の埋没後に設けられた施設と考えられるもので、東部が未調査のため不明な点が多いが東部から西部に排水する機能を果たしたものと推定される。構築時期は限定できないものの、肥前系陶磁器の存在から江戸時代中期以降に設けられた農耕用の施設と推定される。

参考文献

・西岡三四郎　1977「五條宮古瓦」『八尾市史　文化財編』八尾市役所

・吉岡　哲　1988「第５章　歴史考古学からみた八尾　第三節　平野部の古代寺院跡と行宮跡」『増補版　八尾市史（前近代）本文編』八尾市役所

・原田昌則・成海佳子　1987「Ⅱ老原遺跡（第２次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和61年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告13　（財）八尾市文化財調査研究会

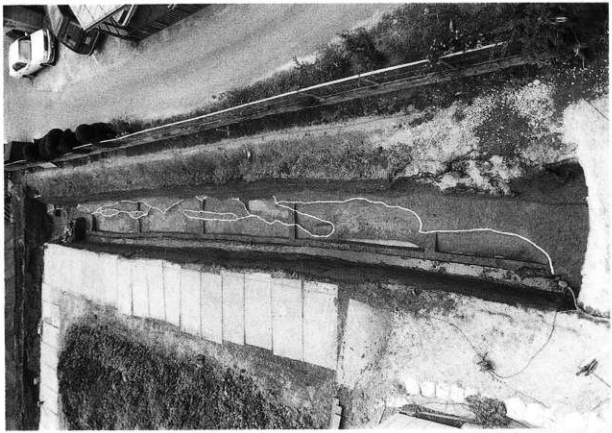
・西村公助　1989「16老原遺跡（第４次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告25（財）八尾市文化財調査研究会

・高萩千秋　1998「Ⅱ老原遺跡（第５次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告59』（財）八尾市文化財調査研究会

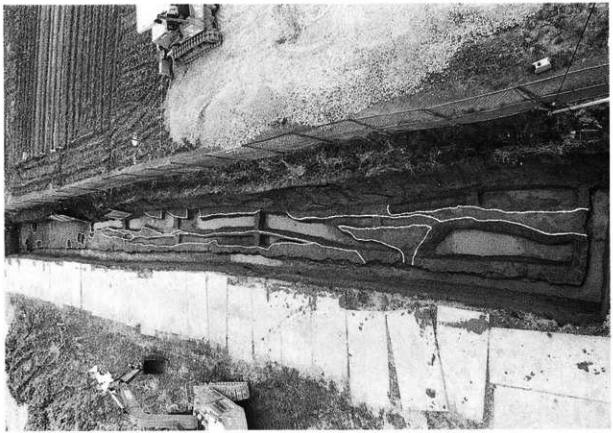
・清　斎　1997「２．老原遺跡（95－319）の調査」『八尾市内遺跡平成８年度調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告36　平成８年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

・原田昌則　1997「６．老原遺跡第７次調査（ＯＨ96－７）」『平成８年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会

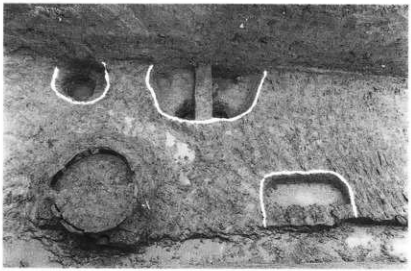
図　　版



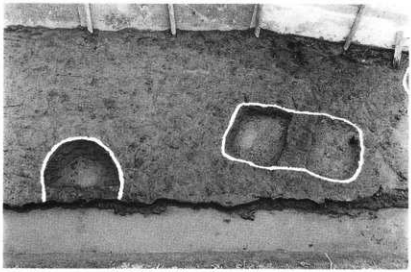
南北調査区全景（北から）



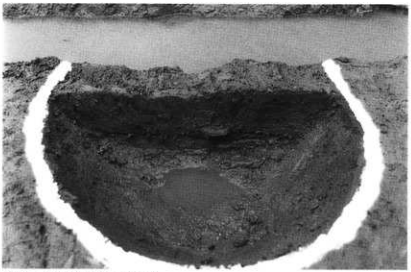
東西調査区全景（西から）



ＳＥ－１、ＳＫ－１・２、ＳＰ－１検出状況（北から）



ＳＫ－３、ＳＰ－２検出状況（北から）

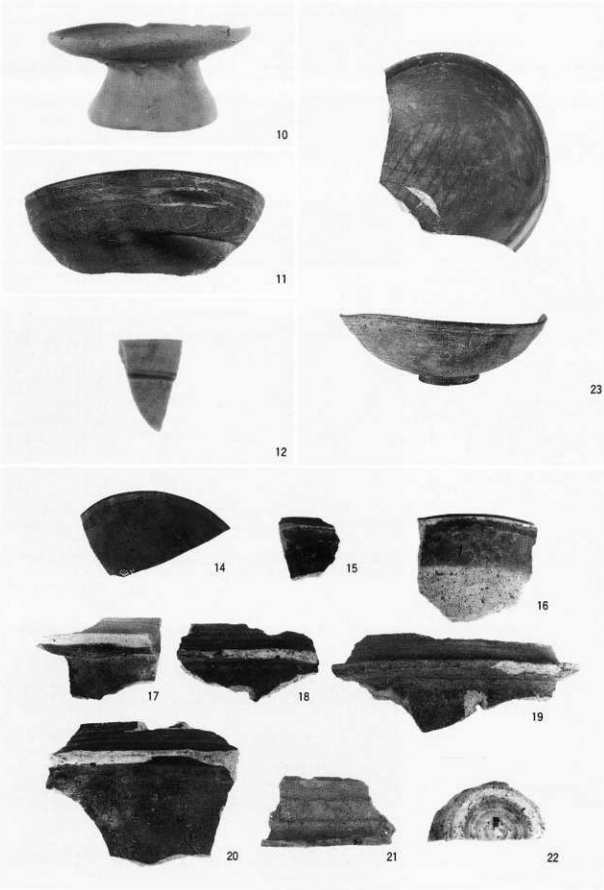


ＳＰ－２検出状況（南から）

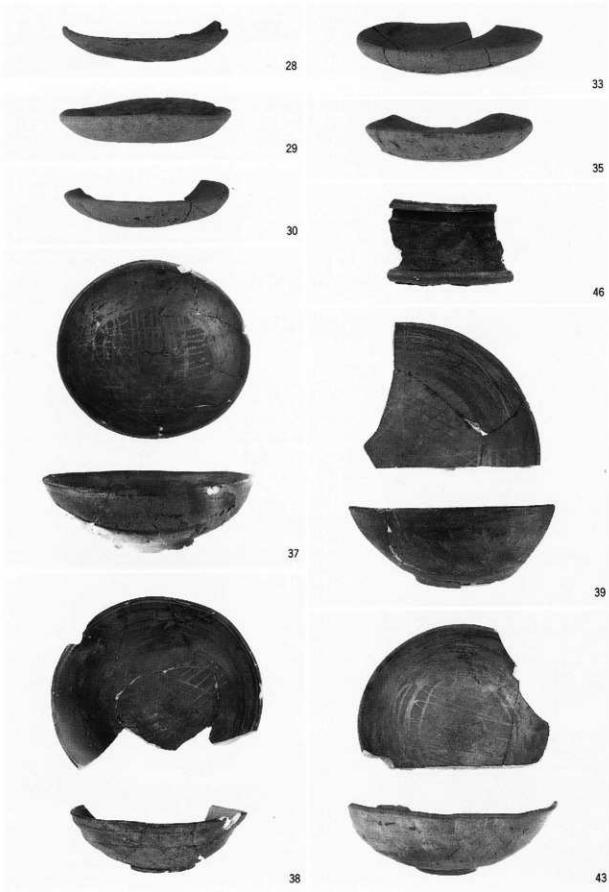
石組み溝－１検出状況（東から）

同上　完掘状況（東から）

石組み溝－１、ＳＤ－７検出状況（西から）



ＳＤ－３（10～12）、ＳＤ－４（14～22）、ＳＤ－５（23）出土遺物



SD－6（28～30、33・35・37～39、43・46）出土遺物

44

47

48

49

50

51

52

53

54

SD－6（44）、SD－7（47～54）出土遺物

55

59

56

62

57

61

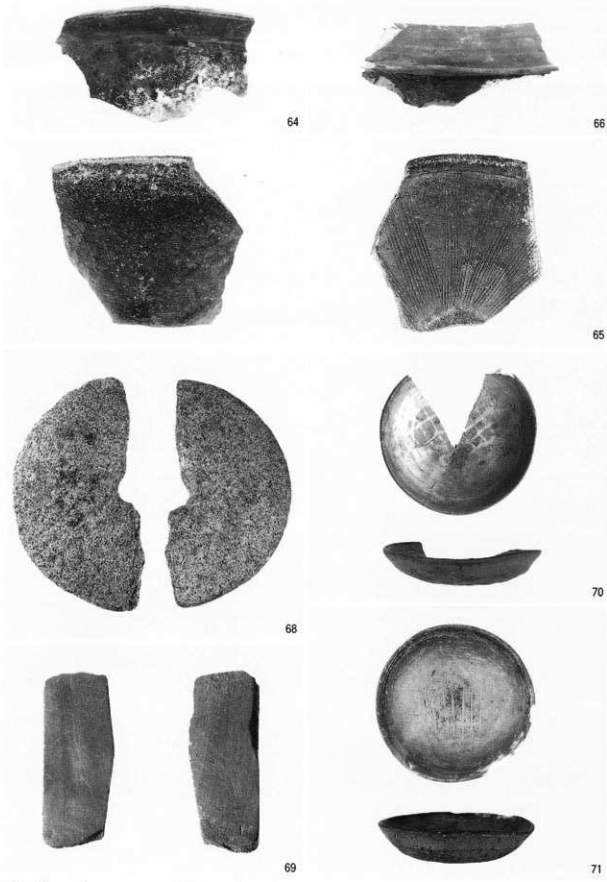
58

63

60

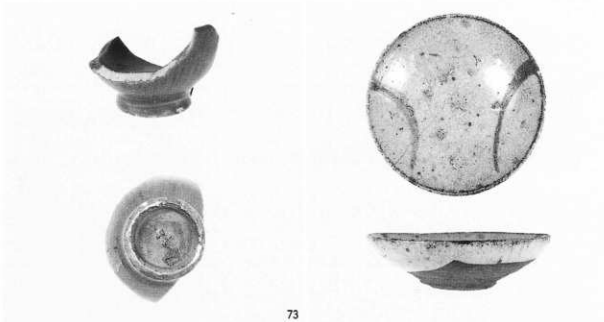
ＳＤ－７（55～63）出土遺物

図版八

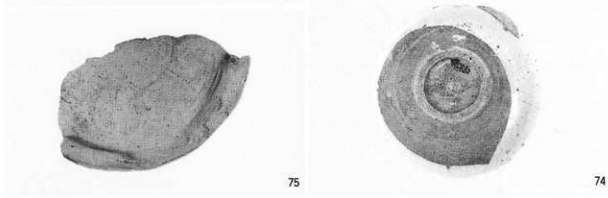


石組み溝－1（64～66・68・69）、第3層（70・71）出土遺物

72



73



75

74

76

第3層（72～76）出土遺物

Ⅳ　老原遺跡第７次調査（ＯＨ96－７）

例　言

1．本書は、大阪府八尾市老原１丁目地内で実施した道路新設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1．本書で報告する老原遺跡第７次調査（ＯＨ96－７）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋148-３号　平成８年10月23日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は平成８年12月２日から平成８年12月24日（実働15日間）にかけて原田昌則を担当者として実施した。面積約180㎡を測る。
　現地調査においては、垣内洋平・北原清子・岸田靖子・辻野優子が参加した。
1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成16年９月30日に完了した。
1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－伊藤静江・岩沢玲子・北原・加藤邦枝・竹田貴子・田島宜子・永井律子・中村百合・村井俊子・村田知子・吉川　栄・若林久美子、図面トレース－山内千恵子、遺物写真－原田が行った。
1．本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 77
第２章　調査概要 …… 78
　第１節　調査の方法と経過 …… 78
　第２節　基本層序 …… 79
　第３節　検出遺構と出土遺物 …… 79
　　１）検出遺構 …… 79
　　２）遺構に伴わない出土遺物 …… 89
第３章　まとめ …… 92

挿図目次

第1図　調査地周辺図 …… 77
第2図　調査地地区割り図 …… 78
第3図　SK－1平断面図 …… 79
第4図　検出遺構平断面図 …… 80
第5図　SK－2平断面図 …… 81
第6図　SK－1、SK－2出土遺物実測図 …… 81
第7図　SD－2、SD－6出土遺物実測図 …… 82
第8図　SD－7・10・14～16・19断面図 …… 83
第9図　SD－7出土遺物実測図 …… 84
第10図　SD－8、SD－12、SD－14、SD－15、SD－16、SD－19出土遺物実測図 …… 86
第11図　SP－1、SP－2、SP－5、SP－7、SP－9、SP－10出土遺物実測図 …… 88
第12図　SP－11出土遺物実測図 …… 89
第13図　第3層・第4層出土遺物実測図 …… 90

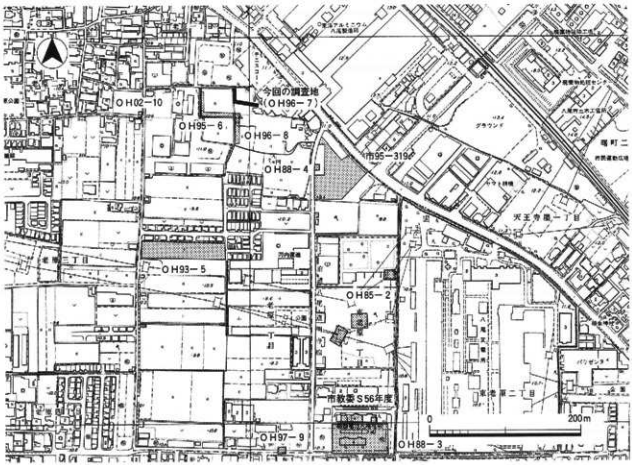
図版目次

図版一　南北調査区全景
　　東西調査区全景
図版二　SK－2検出状況
　　SD－1・2、SP－1検出状況
　　SD－3～5、SP－2～4検出状況
図版三　SD－10、SP－14検出状況
　　SD－14～16、SP－16・17検出状況
　　SD－19検出状況
図版四　SK－2、SD－2、SD－7、
　　SD－16出土遺物
図版五　SD－16、SD－19、SP－11出土
　　遺物
図版六　第3層・第4層出土遺物

第１章　はじめに

老原遺跡は八尾市の中南部に位置する老原１・２丁目、東老原１丁目に広がる古墳時代後期から室町時代に至る複合遺跡である。地理的には、旧大和川の主流であった長瀬川左岸一帯に広がる低位沖積地上に展開している。

当遺跡周辺には、南に志紀遺跡・田井中遺跡、さらに長瀬川を挟んで東に東弓削遺跡、北に矢作遺跡、北東に中田遺跡が存在している。当遺跡内においては、昭和56年度に東老原１丁目で八尾市教育委員会が発掘調査を実施したのを端緒として、昭和60年度以降は当調査研究会・市教育委員会により10次におよぶ発掘調査が実施されており、古墳時代後期～室町時代に至る遺構・遺物が検出されている。また、遺跡範囲北部の老原１丁目地内の田地内には「五条宮寺」と称される塚が存在しており、付近からは古くに奈良時代後期の軒丸瓦が出土したことが「八尾市史」等で報ぜられており、この付近を中心に寺院等の建築物の存在が想定されてきた。平成７年度に本調査地に西接する地点で行った、道路新設工事に伴う第６次調査（ＯＨ95－６）では、平安時代後期の屋瓦類が出土しており、奈良時代後期段階における状況は依然不明ながら、少なくとも平安時代後期段階において屋瓦を使用した建物がこの付近に存在したことが明らかとなった。



第１図　調査地周辺図

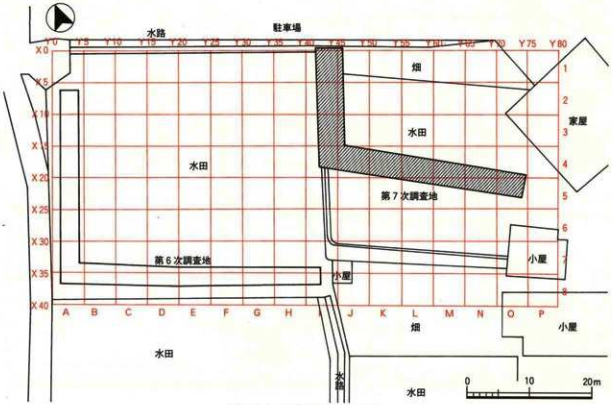
第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の調査は平成７年度～平成９年度に計画された道路新設工事に伴うもので、本年が２年目にあたり、調査地点は平成７年度に実施した第６次調査（ＯＨ95－６）の東側に位置する。調査地点の現況は水田で第６次調査地面とは段差があり本調査地の方が約0.6m程高い。Ｌ字状を呈する新設道路予定地に幅4.0m、長さ延べ45mの調査区を設定した。調査面積は約180㎡である。

調査地の地区割りについては、第６次調査（ＯＨ95－６）の調査基準点を踏襲する形を取り、第６次調査地の北西隅を基点（Ｘ０・Ｙ０）として東西80m、南北40mにわたって設定した。一区画の単位は５m四方で、東西方向はアルファベット（西からＡ～Ｐ）、南北方向は算用数字（北から１～８）で示し、地区の表示は１Ａ区～８Ｐ区と呼称した。地点の表示には、東西線（Ｘ０～Ｘ40）・南北線（Ｙ０～Ｙ80）の交点の数値を使用した（本書Ｐ62参照）。掘削に際しては、現地表下約1.0m前後までを機械掘削した後、以下0.2～0.3mについては人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、現地表下1.2～1.4m（T.P.＋8.4～8.3m）に存在する第５層上面で平安時代後期（11世紀後半～12世紀前半）、鎌倉時代前期（12世紀末期～13世紀中葉）、室町時代前～中期（14世紀末期～15世紀後半）の遺構を検出した。検出した遺構には土坑２基（ＳＫ－1～ＳＫ－2）、溝19条（ＳＤ－1～ＳＤ－19）、小穴17個（ＳＰ－1～ＳＰ－17）がある。遺物は遺構内および第４層を中心にコンテナ３箱程度が出土している。



第２図　調査地地区割り図

第２節　基本層序

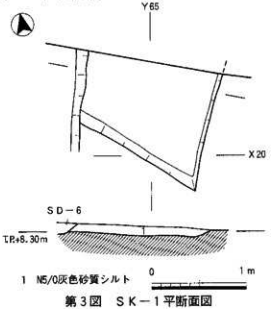
調査地点の現状は水田であり、本調査地の西側で実施した第６次調査地との高低差は約0.6m程度高位置にあるが、調査の結果、現作土下に盛土の存在（0.6m前後）が認められ、調査地点が人工的な地形改変を受けていたことが明らかとなった。従って、第１層が第６次調査の第１層（現作土）と対応する。第２層・第３層が粘土質シルトを主体としている。第３層上面が室町時代前～中期の遺構構築面で、第６次調査の第３層に対応する。第５層上面が平安時代後期の遺構構築面で、第６次調査の第７層に対応する。普遍的に存在した８層（第０層～第７層）を摘出して基本層序とした。

第０層　客土と上面は現作土。層厚0.7～0.8m。現地面の標高はT.P.＋9.6m前後である。
第１層　N6/0灰色シルト。旧作土。層厚0.1m前後。
第２層　10GY7/1明緑灰色粘土質シルト。層厚0.05～0.1m。
第３層　10GY6/1緑灰色粘土質シルト。層厚0.15～0.2m。室町時代前～中期の遺構構築面。
第４層　10GY8/1明緑灰色砂質シルト。層厚0.1～0.2m。平安時代後期～鎌倉時代前期の遺物を少量含む。鎌倉時代前期の遺構構築面。
第５層　2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルト。層厚0.05～0.2m。平安時代後期の遺構検出面。
第６層　10GY7/1明緑灰色シルト～細粒砂。層厚0.15～0.3m。面的には捉えていないが、上面を切り込む自然河川の存在を認める。
第７層　10BG7/1明青灰色粘土質シルト。層厚0.3m。

第３節　検出遺構と出土遺物

１）検出遺構

調査の結果、第５層上面で平安時代後期、鎌倉時代前期、室町時代前～中期の遺構を検出した。遺構の帰属時期は、平安時代後期（11世紀後半～12世紀前半）のものがＳＤ－10・12・14、ＳＰ－１・２・５・９、鎌倉時代前期（12世紀末～13世紀前頭）のものがＳＤ－１・２・６・７・17・18、ＳＰ－７・10・11、室町時代前～中期（14世紀末～15世紀後半）のものがＳＫ－２、ＳＤ－15・16・19で、鎌倉時代前期の遺構については第４層、室町時代前～中期の遺構については第３層上面が本来の構築面と考えられる。以下、各遺構毎に概説する。

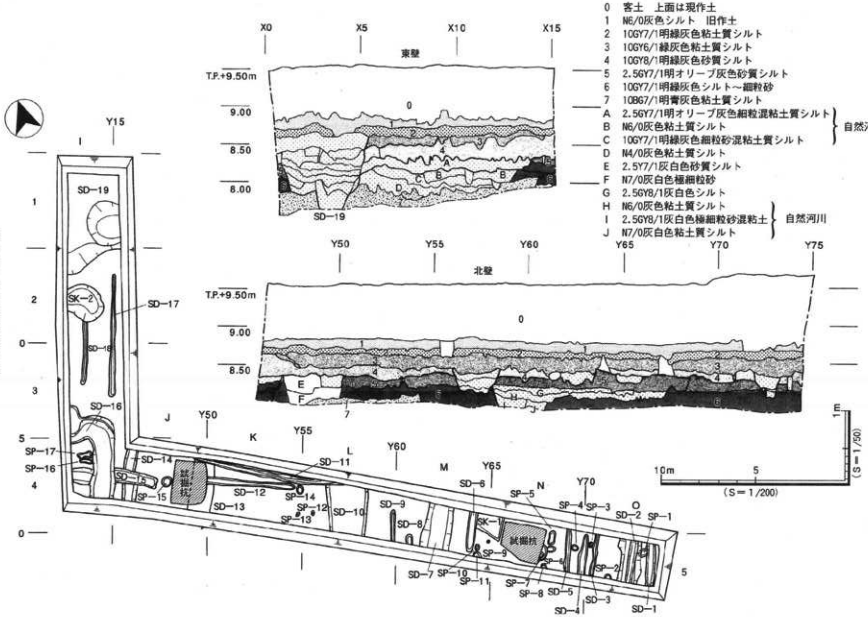


第３図　ＳＫ－１平断面図

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

４・５ＭＮ地区で検出した。西部がＳＤ－６に切られ北部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.34m、南北幅1.0m、深さ0.06mを測る。埋土は炭・灰を含むN5/0灰色砂質シルトの単一層である。遺物は土師器小皿・土釜、瓦器椀の小破片が極少量出土している。瓦

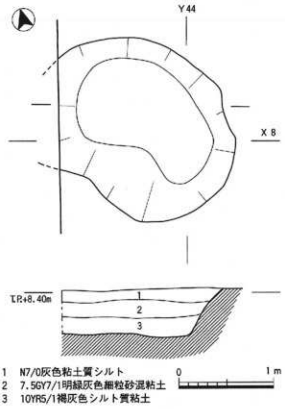

0 客土 上面は現作土
1 N6/0灰色シルト 旧作土
2 10GY7/1明緑灰色粘土質シルト
3 10GY6/1緑灰色粘土質シルト
4 10GY8/1明緑灰色砂質シルト
5 2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルト
6 10GY7/1明緑灰色シルト～細粒砂
7 10B6/1明青灰色粘土質シルト
A 2.5GY7/1明オリーブ灰色細粒混粘土質シルト
B N6/0灰色粘土質シルト
C 10GY7/1明緑灰色細粒砂混粘土質シルト
D N4/0灰色粘土質シルト
E 2.5Y7/1灰白色砂質シルト
F N7/0灰白色極細粒砂
G 2.5GY8/1灰白色シルト
H N6/0灰色粘土質シルト
I 2.5GY8/1灰白色極細粒砂混粘土
J N7/0灰白色粘土質シルト
自然河川
自然河川
東壁
北壁
T.P.+9.50m
9.00
8.50
8.00
X0
X5
X10
X15
Y50
Y55
Y60
Y65
Y70
Y75
Y15
SD-19
SK-2
SD-17
SD-16
SP-17
SP-16
SP-15
SD-14
SD-11
SD-12
SP-14
SP-12
SD-13
SP-13
SD-10
SD-9
SD-8
SD-6
SP-5
SP-4
SP-3
SD-2
SP-1
SK-1
SP-9
SD-7
SP-10
SP-11
SP-7
SP-8
SD-5
SD-3
SD-4
SD-1
試掘坑
10m
5
(S=1/200)
(S=1/50)

図面番号 4 番

器椀２点（１・２）を図化した。１は口縁部の小破片である。復元口径13.0cmを測る。２は底部片である。高台は形骸化した貼り付け高台で底径3.3cmを測る。見込に平行線状ヘラミガキが施されている。型式的には尾上編年（尾上1983）のⅣ－Ⅰ期ないしはⅣ－Ⅱ期にあたり、暦年代は森島編年（森島1992）の13世紀中葉が考えられる。

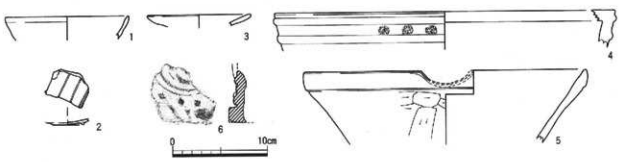
ＳＫ－２

２Ｉ地区で検出した。西端が調査区外に至るが概ね東西方向に長い不整楕円形を呈するもので、南部ではＳＤ－18を切っている。検出部分で東西径1.8m、南北径1.9m、深さ0.5mを測る。埋土は粘土～シルト質粘土を主とする３層が断面形状に沿ってほぼ水平に堆積している。



第５図　ＳＫ－２平断面図

遺物は室町時代前期に比定される土師器小皿・土釜・擂鉢、瓦質火鉢等の小破片が少量出土している。４点（３～６）を図化した。３は土師器小皿の小破片である。復元口径11.0cmを測る。色調は灰白色。胎土は精良である。４は瓦質火鉢の小破片である。口縁部が内側に水平に折れ曲がるもので、外面に２条の凸帯が巡り、その間にスタンプによる花文が押捺されている。色調は黒灰色。胎土は精良。いわゆる「奈良火鉢」にあたるもので、立石編年（立石1995）の浅鉢Ⅵ（14世紀後半～末期）に分類される。５は土師器擂鉢の小破片である。復元口径30.0cmを測る。体部外面はヘラケズリ、内面は焼成時に生じた器面剥離が顕著である。色調は淡赤褐色。胎土中に1mm以下の長石・石英が多量に含まれている。６は巴文軒丸瓦の小破片である。残存部分から左巻き三巴文と推定される。圏線を経て外区内縁には小粒で隆起の大きな珠文が巡っている。外縁は直立縁で高く上部はナデが行なわれている。色調は淡灰色。胎土中に0.5mm以下の砂粒を少量含む。鎌倉時代後半のものか。出土遺物からみて遺構の帰属時期は室町時代前期末が推定される。



第６図　ＳＫ－１（１・２）、ＳＫ－２（３～６）出土遺物実測図

溝（ＳＤ）

ＳＤ－１

調査区東端の５０地区で検出した。南北方向に伸びるもので、検出部分で検出長2.2m、幅0.46m、深さ0.18mを測る。埋土はN5/0灰色砂質シルトの単一層である。遺物は鎌倉時代前期に比定される土師器小皿・土釜、瓦器椀、瓦質甕・足釜、白磁碗、陶器の小破片が少量出土しているが図化し得たものはない。

ＳＤ－２

ＳＤ－１に西接して並行に伸びる。溝の東部がやや深くなる二段掘方を呈する。検出長2.24m、幅1.1～1.21m、深さ0.21mを測る。埋土は３層から成り、中層を除いて上下層は粘土質シルトが優勢な不均質な層相である。遺物は鎌倉時代前期に比定される土師器小皿・土釜、瓦器椀、瓦質甕・足釜等の小破片が少量出土している。２点（７・８）を図化した。７は三足足釜の口縁部の小片である。復元口径16.2cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は横位のハケ調整が行なわれている。色調は灰色。胎土は良好。13世紀代に比定される。８は瓦質甕の小破片である。口頸部は体部から外反して大きく開いた後、外傾し尖り気味の端部を形成している。口頸部外面に右上りのタタキを施す。色調は黒灰色。胎土中に0.5㎜以下の砂粒を少量含む。13世紀代に比定される。

ＳＤ－３

４・５０地区の西部で検出した。南北方向に伸びる小溝で、検出長2.2m、幅0.16～0.26m、深さ0.05mを測る。埋土はN7/0灰白色砂質シルトの単一層である。遺物は土師器小皿、瓦器椀等が極少量出土したが小片のため時期は判然としない。

ＳＤ－４

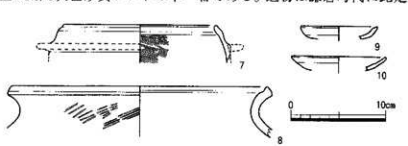
ＳＤ－３に西接して並行に伸びる小溝である。検出長2.1m、幅0.2～0.42m、深さ0.08mを測る。埋土はN7/0灰白色砂質シルトの単一層である。遺物は土師器小皿、瓦器椀等の小片が極少量出土したが時期を明確にし得たものはない。

ＳＤ－５

ＳＤ－４に西接して並行に伸びる。検出長2.24m、幅0.18～0.28m、深さ0.04mを測る。埋土はN7/0灰白色砂質シルトの単一層である。遺物は土師器小皿・土釜、瓦器椀、白磁碗、青磁碗の小片が少量出土したが時期を明確にし得たものはない。

ＳＤ－６

４・５Ｍ地区で検出した。南北方向に伸びるものでＳＫ－１の西部を切っている。検出長2.1m、幅0.46m、深さ0.1mを測る。埋土はN5/0灰色砂質シルトの単一層である。遺物は鎌倉時代に比定される土師器小皿、瓦器椀、須恵器鉢、白磁碗の小片が少量出土している。土師器小皿２点（９・10）を図化した。共に小破片で口縁部の残存率は1/8程度である。水平な底部から斜上方へ口

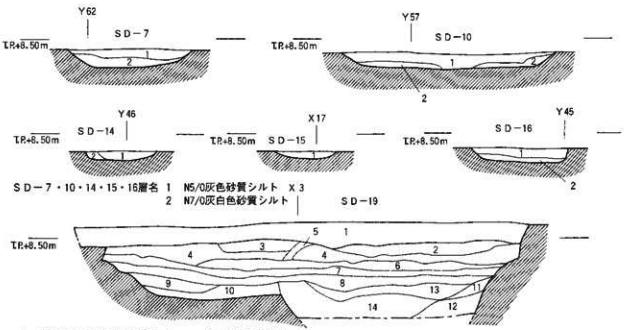


第７図　ＳＤ－２（７・８）、ＳＤ－６（９・10）出土遺物実測図

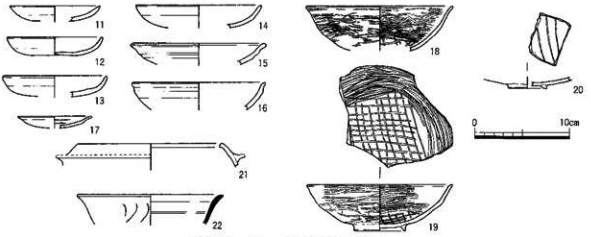
縁部が伸びる９と、底部から内湾気味に伸びる10がある。色調は共に淡赤褐色。胎土は精良。13世紀代に比定される。

ＳＤ－７

４・５Ｍ地区で検出した。南北方向に伸びるもので、検出長2.28m、幅1.32～1.6m、深さ0.2mを測る。埋土は逆台形を呈する断面形状に沿って２層が堆積している。遺物は鎌倉時代前期に比定される土師器小皿、瓦器椀・足釜の小片が少量出土している。12点（11～22）を図化した。11～13は土師器小皿である。残存率は13が1/2、11・12が1/4程度である。口縁部の形状では斜上方に直線的に伸びる11と内湾した後、斜上方へ伸びる12・13がある。色調は11・12が淡灰褐色、13が褐灰色である。胎土は３点共に精良である。14～16は土師器中皿である。３点共に口縁部の残存率は1/8以下の小破片である。復元口径13.0～13.8cmを測る。口縁部は斜上方に直線的に伸びる14と口縁部付近が強いヨコナデのため小さく外反して終る15・16がある。色調は14が淡橙色、15・16が淡い灰褐色である。胎土は精良。17は瓦器小皿の小破片である。浅目の体部に外反して斜上方に伸びる口縁部が付く。復元口径7.7cmを測る。18～20は和泉型瓦器椀である。18は深目の体部を有するもので口縁部は強いヨコナデにより外反気味に開く。復元口径15.3cmを測る。体部内外面のヘラミガキは横位に密に施されており、外面については四分割による調整が想定される。見込みのヘラミガキは格子状である。19は全体の1/3程度が残存している。18に比して器高がやや低いもので、復元口径15.1cm、器高5.0cm、高台高0.07cmを測る。体部内外面の調整は18に似る。18・19共に尾上編年のⅡ－１期（12世紀前半）に比定される。20は偏平で高台径の小さい高台を有する瓦器椀の小破片である。復元高台径4.0cm、高台高0.04cmを測る。見込みに平行線状ヘラミ



第８図　ＳＤ－７・10・14～16・19断面図



第９図　ＳＤ－７出土遺物実測図

ガキを施す。尾上編年のⅢ－３期（13世紀前半）前後のものか。21は三足足釜の口縁部片である。復元口径15.0cmを測る。22は白磁碗である。口縁部付近で強く外反する。復元口径15.0cmを測る。体部外面に横目文、内面上位に一条の沈線が巡る。釉はやや濁った白色で光沢がある。森田・横田編年（森田・横田1978）の白磁碗Ｖ－２・ｂ（11世紀中～12世紀初頭）に比定される。出土遺物は時期差があるが、最も新しい遺物からみて遺構の廃絶時期は13世紀前半が推定される。

ＳＤ－８

ＳＤ－７に西接して南北方向に伸びる小溝である。検出長0.48m、幅0.29m、深さ0.07mを測る。埋土はN7/0灰白色砂質シルトの単一層である。遺物は平安時代後期に比定される土師器・土釜、瓦器椀、丸瓦等の小破片が少量出土している。瓦器椀の小破片１点（26）を図化した。体部内外面に横位のヘラミガキ、見込みに格子状ヘラミガキを施す。尾上編年のⅡ－２期（12世紀中葉）に比定される。

ＳＤ－９

ＳＤ－８に西接して南北方向に伸びる小溝である。検出長1.5m、幅0.2m、深さ0.16mを測る。埋土は断面形状に沿って砂質シルトを主体とする２層が堆積している。遺物は出土していない。

ＳＤ－10

４・５Ｌ地区で検出した。南北方向に伸びるもので、北部がＳＤ－11に切られている。検出長2.5m、幅1.82～2.2m、深さ0.16mを測る。断面形状は底部が水平な皿状を呈する。埋土は２層から成り、上層がN5/0灰色砂質シルト下層がN7/0灰白色砂質シルトである。遺物は平安時代後期に比定される土師器小皿・土釜、瓦器椀・小皿、須恵器鉢等の小破片が少量出土しているが図化し得たものはない。

ＳＤ－11

４Ｊ～４Ｌ地区で検出した。東西方向に伸びる小溝で、東部でＳＤ－10、西部でＳＤ－13を切っている。検出長7.6m、幅0.21～0.34m、深さ0.06mを測る。埋土は10GY8/1明緑灰色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

ＳＤ－12

ＳＤ－11に南接して東西方向に伸びる小溝で、西端でＳＤ－13を切っている。検出長4.6m、幅0.2～0.34m、深さ0.06mを測る。埋土はN7/0灰白色砂質シルトの単一層である。遺物は平安時代

後期に比定される土師器小皿、瓦器椀等の小破片が極少量出土している。「て」の字状口縁を呈する土師器小皿２点（23・24）を図化した。共に小破片で復元口径10.0cmを測る。色調は23が灰白色、24が淡橙色である。胎土は精良。11世紀後半～12世紀前半に比定される。

ＳＤ－13

４Ｊ・Ｋ地区で検出した。南北方向に伸びるもので、ＳＤ－11およびＳＤ－12に一部が切られている。調査では東肩を検出したのみで、西部は試掘による掘削のため全容は判然としないが、北壁断面からみて幅1.2m前後、深さ0.15m程度の規模が想定される。埋土は10YR5/2灰黄褐色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

ＳＤ－14

４Ｊ地区で検出した。南北方向に伸びるもので、一部ＳＤ－15に切られている。検出長2.68m、幅0.6～0.73m、深さ0.1mを測る。埋土は砂質シルトを主体とする２層から成る。遺物は平安時代後期に比定される土師器小皿、瓦器椀等の小片が極少量出土している。「て」の字状口縁を呈する土師器小皿１点（25）を図化した。復元口径9.8cmを測る。色調は淡橙色。胎土は精良。11世紀後半～12世紀前半に比定される。

ＳＤ－15

４Ｉ～４Ｊ地区にかけて東西方向に伸びるもので、ＳＤ－14を切り、ＳＤ－16に切られている。検出長4.48m、幅0.52～0.86m、深さ0.08mを測る。埋土はN5/0灰色砂質シルトの単一層である。遺物は鎌倉時代後期～室町時代中期に比定される土師器土釜、須恵器鉢、瓦質土釜等の小片が極少量出土している。２点（27・30）を図化した。27は東播系の須恵器片口鉢である。口縁部の小破片で復元口径23.1cmを測る。ＩＩ縁部は玉縁状で外面は重ね焼きのため黒色に変色している。森田稔氏による編年（森田1995）の第Ⅲ期第２段階（14世紀前半）に比定される。30は瓦質羽釜で鍔部を欠く。口縁部は内湾気味に内傾するもので外面に３条の凹線が巡る。森島康雄氏による中河内地域の羽釜分類（森島1990）のＥ型式にあたるもので、15世紀前半に推定される。

ＳＤ－16

３・４ＩＪ地区で検出した。南北方向に伸びた後、屈曲して東西方向に流路を変えるもので、南部では室町時代中期のＳＤ－15を切っている。検出部分で南北長4.21m、東西長2.3m、幅1.1～2.0m、深さ0.16mを測る。埋土は上層のN5/0灰色砂質シルトと下層のN7/0灰白色砂質シルトの２層から成る。遺物は室町時代中期の土師器土釜、瓦質甕・土釜、軒丸瓦・平瓦等の小片極少量出土している。４点（29・31・32・34）を図化した。29は瓦質羽釜の小破片である。復元口径24.9cm、復元鍔径30.5cmを測る。外傾する口縁部外面に２段の段を有する。胎土は粗く１㎜以下の長石・石英・角閃石を多量に含む。色調は黒灰色であるが全体に炭素付着が不良である。森島分類のＥ型式（15世紀中葉）のものか。31・32は瓦器甕である。共に体部上位から器壁幅を漸増させ直上方に伸びるもので、短い頸部を作る32と体部から口縁部に移頂する31があるが共に口縁部は強く外方向に屈曲し端部を丸くして終る。型式的には32が古く15世紀前半、31が15世紀後半に比定される。34は右巻き三巴文軒丸瓦の小片である。外区内縁には二本の圏線間に小粒で隆起の小さい珠文が巡る。外縁は幅広の直立縁で高い。室町時代前半のものか。遺構の帰属時期は室町時代中期後半が推定される。

ＳＤ－17

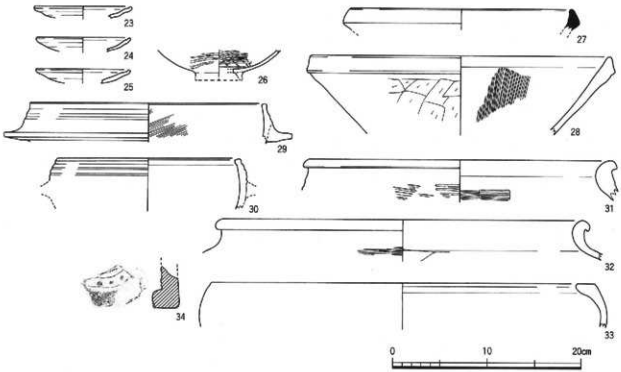
２Ｉ・Ｊ～３Ｉ・Ｊ地区にかけて南北方向に伸びるもので、断面形状が「Ｕ」の字形を呈する小溝である。全長6.4m、幅0.2m前後、深さ0.06mを測る。埋土はN5/0灰色砂質シルトの単一層である。遺物は鎌倉時代前期に比定される瓦器椀の小片が極少量出土しているが図化し得たものはない。

ＳＤ－18

２Ｉ・Ｊ～３Ｉ・Ｊ地区にかけて南北方向に伸びる小溝で、北端はＳＫ－２に切られている。検出長3.3m、幅0.2m前後、深さ0.03mを測る。遺物は瓦器椀の小片が１点出土したのみであるが、東接するＳＤ－17と同様の性格を有するものから、時期的にはＳＤ－17同様、鎌倉時代前期が想定される。

ＳＤ－19

調査地北端の１１・Ｊ地区で検出した。東西方向に伸びるもので、幅3.85～5.32m、深さ0.78mを測る。断面形状は概ね逆台形を呈するが、検出部分の北東部分では摺鉢状に落ち込む部分が認められた。埋土13層から成り、粘土～砂質シルトが優勢な土質が断面形状に沿って堆積をしている。遺物は室町時代中期に比定される土師器小皿・土釜、瓦質摺鉢・火鉢、平瓦等の小片が少量出土している。２点（28・33）を図化した。28は瓦質摺鉢である。復元口径31.8cmを測る。体部外面は鱗状のヘラケズリ、内面はナデにより平滑にした後、擂目を入れる。14世紀後半に比定される。33は大形の瓦質火鉢である。「奈良火鉢」と称されるもので立石分類の浅鉢・（14世紀末～15世紀前半）にあたる。遺構の帰属時期は室町時代中期前半が考えられる。



第10図　ＳＤ－８（26）、ＳＤ－12（23・24）、ＳＤ－14（25）、ＳＤ－15（27・30）、ＳＤ－16（29・31・32・34）、ＳＤ－19（28・33）出土遺物実測図

小穴（ＳＰ）

全体で17個（ＳＰ－１～ＳＰ－17）検出した。東部に集中して分布する傾向が認められ、一部の小穴については建物を構成する柱穴の可能性があるが、小面積のため柱列を確認し得たものはない。上面の形状では、円形・楕円形・不定形がある。規模は幅0.11～0.78m、深さ0.03～0.2mを測る。埋土は10GY8/1明緑灰色砂質シルトがＳＰ－２～４・15・16・17、N7/0灰白色砂質シルトがＳＰ－１・５・６・９～14、N5/0灰色砂質シルトがＳＰ－７・８に区別される。遺物はＳＰ－１・２・４～11・13から平安時代後期～鎌倉時代初頭を中心とする土器類の小破片が少量出土している他、ＳＰ－11からは平瓦・唐草文軒平瓦が出土している。

第1表　小穴法量表（単位m）

遺構番号	地区	平面形	長径	短径	深さ	埋　土	出土遺物
ＳＰ－１	5Ｏ	楕円形	0.53	0.42	0.10	N7/0灰白色砂質シルト	土師器皿・羽釜、瓦器椀　38・45
ＳＰ－２	5Ｏ	不明	0.28	0.23	0.10	10GY8/1明緑灰色砂質シルト	土師器皿、瓦器椀　35・37
ＳＰ－３	〃	楕円形	0.27	0.21	0.12	〃	
ＳＰ－４	5Ｎ	不整円形	0.33	0.28	0.03	〃	土師器皿、瓦器椀
ＳＰ－５	4・5Ｎ	楕円形	0.72	0.33	0.06	N7/0灰白色砂質シルト	土師器皿、瓦器椀　36
ＳＰ－６	5Ｎ	〃	0.42	0.31	0.15	〃	土師器皿、瓦器椀
ＳＰ－７	〃	不明	0.89	0.34	0.18	N5/0灰色砂質シルト	土師器皿・羽釜、瓦器椀　41・43
ＳＰ－８	〃	〃	0.22	0.20	0.12	〃	土師器皿
ＳＰ－９	5Ｍ	円形	0.11	0.11	0.10	N7/0灰白色砂質シルト	土師器皿、瓦器皿・椀　42
ＳＰ－10	〃	楕円形	0.27	0.19	0.15	〃	土師器皿、須恵器鉢、瓦器椀39・40・44
ＳＰ－11	〃	不明	0.45	0.25	0.15	〃	土師器皿・羽釜、須恵器鉢、瓦器椀、歴瓦46～52
ＳＰ－12	4Ｉ	楕円形	0.22	0.16	0.05	〃	
ＳＰ－13	4Ｋ	〃	0.23	0.12	0.06	〃	瓦器椀
ＳＰ－14	4Ｋ・Ｌ	〃	0.41	0.32	0.07	〃	
ＳＰ－15	4Ｊ	円形	0.50	0.47	0.04	10GY8/1明緑灰色砂質シルト	
ＳＰ－16	4Ｉ	不定形	0.68	0.10	0.03	〃	
ＳＰ－17	〃	〃	0.72	0.14	0.03	〃	

ＳＰ－１出土遺物

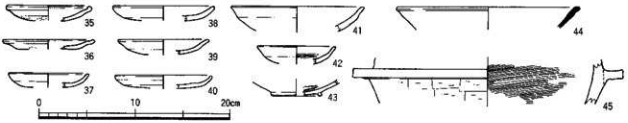
２点（38・45）を図化した。38は土師器小皿の小破片である。復元口径10.6cmを測る。色調は淡い褐灰色。胎土は精良。45は土師器羽釜で口縁部を欠く。鍔は水平に貼り付けられており、端面は垂直方向に面を形成している。体部外面は左から右へのヘラケズリ、内面は横位のハケ調整が行なわれている。色調は淡赤褐色で、鍔の下部以下に煤の付着が認められる。胎土は粗く４mm以下の長石を多く含む。形状、胎土から河内地方産以外のものであるが、小片のため産地や時期は明確でない。

ＳＰ－２出土遺物

２点（35・37）を図化した。35・37は土師器小皿の小破片である。35は「て」の字状口縁を有するもので、復元口径8.7cmを測る。37は口縁部が斜上方に伸びるもので復元口径8.3cmを測る。色調は35が灰白色、37が淡褐灰色である。胎土は35・37が共に精良、35が11世紀後半～12世紀前半、37が12世紀代のものか。

ＳＰ－５出土遺物

「て」の字状口縁を有する土師器小皿１点（36）を図化した。口縁部の約1/4が残存しており、復元口径9.5cm、器高1.0cmを測る。色調は淡赤橙色。胎土は水簸された精良粘土を使用している。



第11図　ＳＰ－１（38・45）、ＳＰ－２（35・37）、ＳＰ－５（36）、ＳＰ－７（41・43）、ＳＰ－９（42）、ＳＰ－10（39・40・44）出土遺物実測図

11世紀後半～12世紀前半に比定される。

ＳＰ－７出土遺物

２点（41・43）を図化した。41は土師器中皿で口縁部の約1/4が残存している。復元口径13.7㎝を測る。色調は灰白色。胎土は精良。11世紀後半～12世紀前半に比定される。43は瓦器椀の小破片である。高台は「ハ」の字形に貼り付けられており、端面は平坦面を呈する。見込みに平行線状ヘラミガキを施す。尾上編年Ⅲ－１期（12世紀後半）のものか。なお、全体に炭素付着が認められず、一部焦げた部分が認められるため二次加熱を受けたものと考えられる。

ＳＰ－９出土遺物

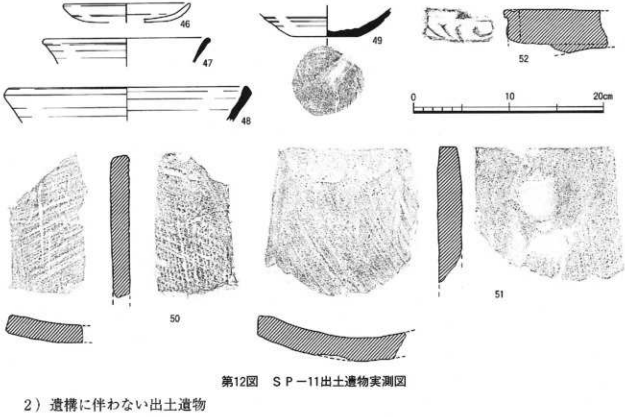
瓦器小皿１点（42）を図化した。口縁部の約1/4が残存しており復元口径8.2㎝を測る。11世紀後半～12世紀前半に比定される。

ＳＰ－10出土遺物

３点（39・40・44）を図化した。39・40は土師器小皿で口縁部が外反気味に伸びる39と内湾して伸びる40がある。色調は共に淡褐灰色。胎土は精良。44は東播系の須恵器椀の小破片である。復元口径19.0㎝を測る。森田編年の第Ⅱ期第２段階（12世紀末～13世紀初頭）に比定される。

ＳＰ－11出土遺物

７点（46～52）を図化した。46は土師器中皿である全体の約1/4が残存している。復元口径13.3㎝、器高2.0㎝を測る。色調は褐灰色。胎土は良好であるが、スコーブで角閃石の含有を認める河内産のものである。47～49は東播系須恵器で、47が椀、48・49が片口鉢に分類される。47は口縁端部付近で小さく外反し丸味のある端部を形成している。復元口径17.2㎝を測る。48は斜上方に直線的に伸びる体部から口縁部が外傾するもので端部は丸く終る。復元口径24.8㎝を測る。49は底部で底径7.2㎝を測る。裏面に回転糸切り痕を残す。47～49は森田編年の第Ⅱ期第２段階（12世紀末～13世紀初頭）に比定される。50・51は平瓦片で共に凹面に糸切り痕と布目痕、凸面に縦位の縄タタキと離れ砂が認められる。色調は50が淡灰色、51が赤橙色である。52は軒平瓦で瓦当面の右側部分が残存している。唐草文を配するが下外区を含む瓦当下部が接合部分を境に欠損しているため全体の意匠等は不明である。色調は灰色。胎土中に４㎜以下の長石・チャートが散見される。上下面に煤の付着が認められるため、瓦としての機能を停止した後に火中する条件での再利用が推定される。平安時代後期に比定される。

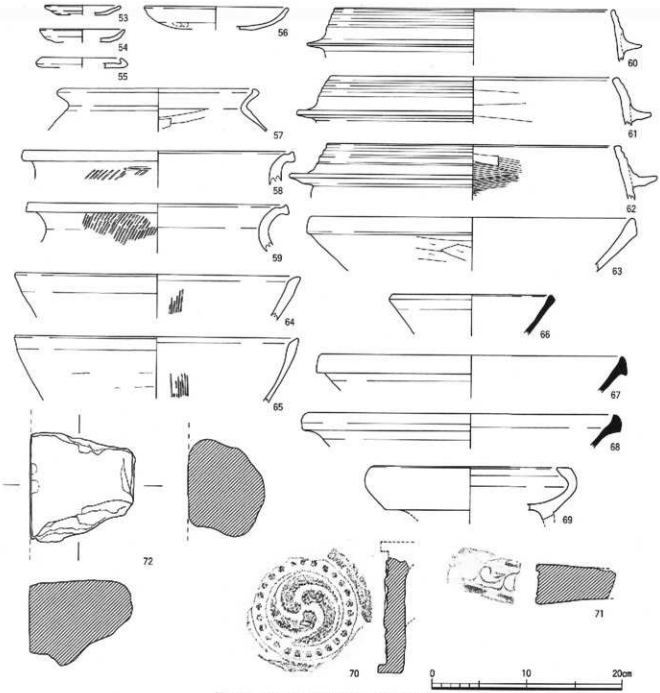


第12図　ＳＰ－11出土遺物実測図

２）遺構に伴わない出土遺物

第３層・第４層出土遺物

20点（53～72）を図化した。時期的には平安時代後期（11世紀後半）～室町時代後期（16世紀）のものがあり、11世紀後半～13世紀後半のものが第４層、14世紀前半～16世紀代のものが第３層に伴うものと考えられる。53～55は土師器小皿である。３点共に小破片で、残存率は口縁部の約1/4程度である。53は「て」の字状口縁を呈する。復元口径7.6cmを測る。11世紀後半～12世紀前半に比定される。54は口縁部が斜上方に直線的に伸びるもので復元口径8.8cmを測る。55は口縁部を内側に折り返す土師器小皿ないしは台付き小皿の一部と考えられる。復元口径8.1cmを測る。なお、土師器小皿とすれば京都系のもので、八尾市域では矢作遺跡第１次調査[注1]のＳＤ－14、花岡山遺跡第１次調査[注2]の包含層での出土例がある。56は土師器中皿である。約1/4が残存しており、復元口径14.8cmを測る。11世紀後半～12世紀前半に比定される。57は土師器羽釜の小破片である。口縁部は「く」の字に屈曲するもので、口縁端部は内側に折り返している。色調は灰白色。胎土中に0.5mm以下の砂粒が散見される。大和地方産のもので、菅原分類（菅原1982）の大和Ⅰ型（16世紀代）にあたる。58・59は瓦質甕である。外反する口頸部を持つもので口縁端部は外傾し幅広の端面を形成している。復元口径は58が28.2cm、59が27.1cmを測る。口頸部外面に右上りのタタキを施す。胎土中に角閃石を含む河内地方産で、形態的には東播系の須恵器壺を模倣したものである。時期は13世紀代が考えられる。60～62は瓦質羽釜である。いずれも口縁部の約1/10程度の小破片である。復元口径は60が29.8cm、61が30.8cmを測る。ほぼ水平方向に貼り付けられた鍔部より内傾ないしは内湾気味に口頸部が伸びるもので、端部は丸く終る60・61と平坦面を成す62がある。３点共に口頸部外面には３段の段状を呈する。61は内外面に煤が付着しており火中したものと推定される。森島編年のＥ型式（14世紀中葉）に比定される。63は土師器摺鉢の小破片であ



第13図　第３層・第４層出土遺物実測図

る。復元口径33.8cmを測る。体部外面は横位のヘラケズリを行なう。色調は淡灰褐色。胎土中に２mm以下の長石が散見される。14世紀後半のものか。64・65は瓦質摺鉢である。口縁端部は共に内側する面を持つもので端部は丸く終る。擂目は64が1.2cm/６本、65が1.6cm・７本である。色調は64が黒灰色、65は瓦質焼成部分の大半が風化のため退色しており灰白色を呈する。共に胎土中に角閃石を含む河内地方産である。15世紀後半のものか。66～67は東播系須恵器の小破片である。66は椀である。復元口径16.6cmを測る。森田編年の第Ⅱ期第２段階（12世紀末～13世紀初頭）に比定される。67・68の片口鉢は口縁端部が上下に拡張されている。復元口径は67が31.8cm、68が32.1cmを測る。67が森田編年の第Ⅲ期第２段階（14世紀前半）、68が森田編年の第Ⅲ期第３段階

（14世紀後半）に比定される。69は三方に脚が付く瓦質鉢の小破片である。平坦な底部から体部が内湾し幅広で平坦な口縁部を作るもので、脚部は大半を欠くが他例からみて畝脚であったと推定される。「奈良火鉢」と称されるもので立石分類の浅鉢Ⅳ（14世紀後半～末期）に比定される。70は右巻きの三巴文軒丸瓦で瓦当上部は丸瓦との接合部分を中心に欠損している。直径14.1cm、厚さ2.6cmを測る。巴は頭部が丸く胴部以下は漸減して尾部に達し末端は圏線と接する。外区内縁には２本の圏線間に小粒で隆起の小さい珠文を26個巡らす。外縁は直立縁で幅1.2cmを測る。外縁上面は弱いナデを行なう程度の雑な調整のため凹凸面を残す。丸瓦との接合位置は低く差し込み溝は浅い。瓦当下側面はヘラケズリの後ナデを行なう。瓦当裏面全面に煤の付着が認められる。山崎信二氏編年[23]の中世Ⅱ期（1210～1260）の和泉産瓦に比定される。71は軒平瓦である。瓦当面に対して左端面のみ遺存する。現状では唐草文の一部が確認できる程度である。検出部分で幅4.1cmを測る。外縁は直立縁で低く上下縁ともに幅狭である。顎部は緩やかな直線顎である。平瓦部の凸面にナデ、凹面にやや粗い布目が認められる。焼成は良好。胎土に２mm以下の長石・チャート・角閃石が散見される。大阪府和泉市の池田寺[24]から同文のものが出土しており、それによれば中心飾りに花菱文が配されている。時期は平安時代後半。72は凝灰岩の切石である。現状では２面で平坦に加工された面がある。建築物の部材として使用されたものと考えられる。

参考文献
・尾上　実　1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念論集　古文化論集』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会（和泉型瓦器椀の型式に使用）
・森島康雄　1992「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ』大和古中近研究会（和泉型瓦器椀の実年代に使用）
・横田賢次郎・森出　勉　1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集４』九州歴史資料館
・森島康雄　1990「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会
・立石堅志　1995「10.瓦質土器〔１〕奈良火鉢」『概説　中世の土器・陶磁器　中世土器研究会編』真陽社
・森島康雄　1990「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会
・森田　稔　1995「８.中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器　中世土器研究会編』真陽社
・苧原正明　1982「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集

註記
註１　原田昌則　1989「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　平成元年度　【矢作遺跡（第１次調査）】」『（財）八尾市文化財調査研究会報告22』（財）八尾市文化財調査研究会
註２　原田昌則　1989「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　平成元年度　Ⅲ花岡山遺跡（第１次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告22』（財）八尾市文化財調査研究会
註３　山崎信二　2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報　第59冊
註４　市本芳三　2001「大阪地域の平安時代後期瓦の様相」『第４回　摂河泉古代寺院フォーラム　中世寺院の幕開け－11・12世紀の寺院の考古学的研究－』摂河泉古代寺院研究会・大阪府立弥生文化博物館

第3章　まとめ

今回の発掘調査は、平成7年度に道路新設工事に先立って実施した第6次調査（OH95－6）の東側に継続する部分で行った調査で、第6次調査と同様、平安時代後期（11世紀後半～12世紀前半）、鎌倉時代前期（12世紀末期～13世紀中葉）、室町時代前期～中期（14世紀末期～15世紀後半）に比定される遺構を検出した。以下、時期毎に概観する。

・**平安時代後期**（11世紀後半～12世紀前半）

東西方向に伸びる調査区を中心に分布している。主な遺構としては、溝（SD－10・12・14）のほか、小穴（SP－1・2・5・9）がある。小穴については狭小な調査区のため、その規則性は判然としないが、おそらく掘立柱建物を構成した柱穴の可能性が高い。

・**鎌倉時代前期**（12世紀末～13世紀中葉）

前代と同様、東西方向に伸びる調査区を中心に分布している。主な遺構には溝（SD－1・2・6・7・17・18）、小穴（SP－7・10・11）等がある。この時期の遺構は、調査地に西接する第6次調査（OH95－6）および第2次調査（OH85－2）、第4次調査（OH88－4）、第5次調査（OH93－5）、老原（93－319）で検出されており、現時点で東西300m以上、南北350m以上の広範囲にわたる居住域の存在が明らかになった。なお、遺構内および包含層である第4層からは、第6次調査と同様、屋瓦類が出土しており、伝「五条宮寺」から想起される寺院等に関連した建物が調査地点に近接する位置に存在したことが明らかになった。今回の調査では、SP－11から平安時代後期の唐草文軒平瓦（52）、第4層から平安時代後期の唐草文軒平瓦（71）、鎌倉時代前期の巴文軒丸瓦（70）等が出土している。なかでも52の唐草文軒平瓦が13世紀前半の遺物と供伴して出土している事実は、平安時代後期に建立された寺院建物が鎌倉時代前期には廃絶し、新たに再建されたことが窺われる。

・**室町時代前期～中期**（14世紀末～15世紀後半）

SK－2・SD－15・SD－16・SD－19等が当該期に比定される遺構である。なかでも、調査区の北端で検出したSD－19については、流路を西方向に求めた場合、第6次調査で検出した南北方向に伸びる溝（SD－7）の北端部に合流する可能性が高い。溝（SD－7）については、屋敷地を囲繞した溝と推定され、今回の調査で検出されたSD－19も同様の性格を帯びた遺構であった可能性が高い。

参考文献

・吉岡　哲　1988「第5章　歴史考古学からみた八尾　第三節　平野部の古代寺院跡と行宮跡」『増補版　八尾市史（前近代）本文編』八尾市役所

・原田昌則　1996「5．老原遺跡第6次調査（OH95－06）」『平成7年度　（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』　（財）八尾市文化財調査研究会　本書に掲載

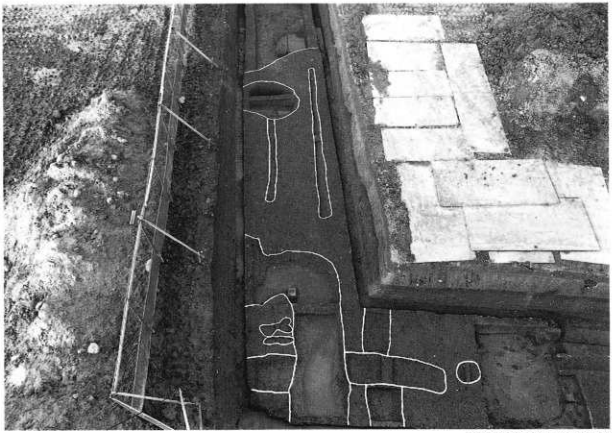
・原田昌則・成海佳子　1987「Ⅱ老原遺跡（第2次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和61年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告13　（財）八尾市文化財調査研究会

・西村公助　1989「16老原遺跡（第4次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告25　（財）八尾市文化財調査研究会

・高萩千秋　1998「Ⅱ老原遺跡（第5次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告59』（財）八尾市文化財調査研究会

・澁　斎　1997「2．老原遺跡（95－319）の調査」『八尾市内遺跡平成8年度調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告36　平成8年度国庫補助事業　八尾市教育委員会

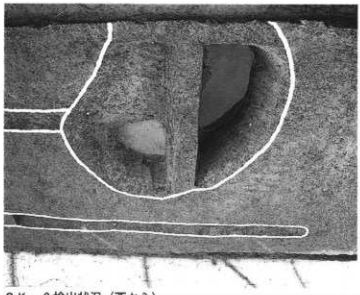
図　　版



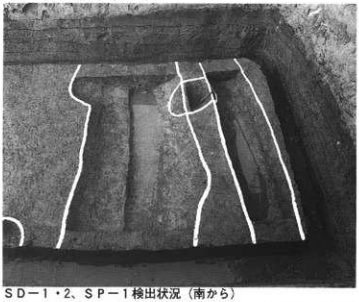
南北調査区全景（南から）

東西調査区全景（東から）

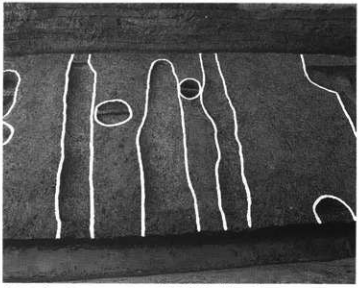
図版二



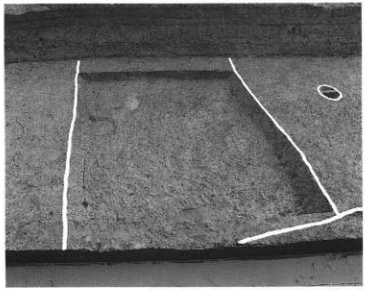
ＳＫ－２検出状況（西から）



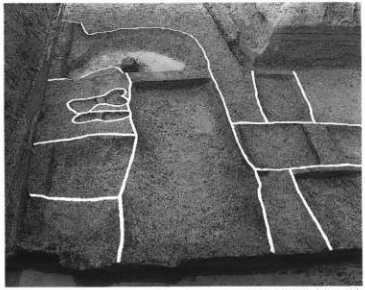
ＳＤ－１・２、ＳＰ－１検出状況（南から）



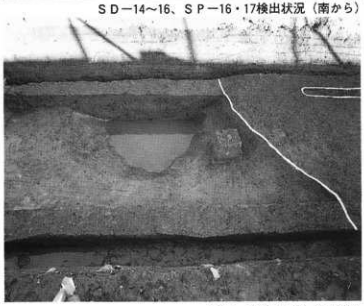
ＳＤ－３～５、ＳＰ－２～４検出状況（南から）



ＳＤ－10、ＳＰ－14検出状況（北から）

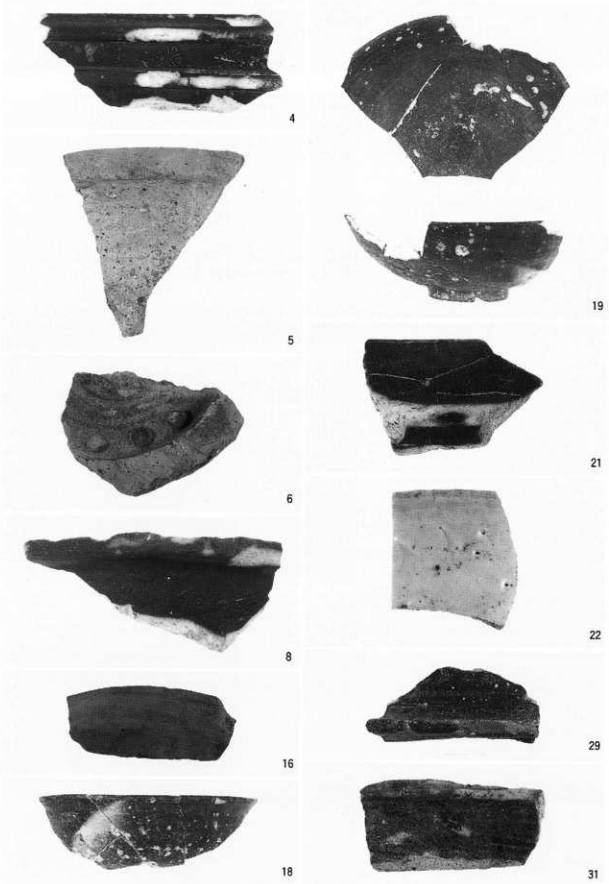


ＳＤ－14～16、ＳＰ－16・17検出状況（南から）



ＳＤ－19検出状況（西から）

図版四



SK－2（4～6）、SD－2（8）、SD－7（16・18・19・21・22）、SD－16（29・31）出土遺物

32

34

33

28

52

50

51

SD－16（32・34）、SD－19（28・33）、SP－11（50～52）出土遺物

57

60

61

62

63

67

68

64

65

69

70

71

72

第3層・第4層出土遺物

V　老原遺跡第８次調査（ＯＨ97－８）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市老原１丁目で実施した道路築造工事に伴う発掘調査の報告書である。
1．本書で報告する老原遺跡第８次調査（ＯＨ97－８）の発掘調査業務は八尾市教育委員会の指示書（八教社文第理288-2号　平成９年８月15日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は平成９年11月４日～同年11月19日（実働11日）にかけて、西村公助を担当者として実施した。調査面積は約220㎡を測る。
　現地調査においては、市森千恵子、中西明美、西岡千恵子、西村和子が参加した。
1．内業調査は現地調査終了後随時行い、平成16年９月30日に終了した。
1．本書に関わる業務は以下の通りである。
　【遺物実測】　岩沢玲子　曹　龍　中村百合　西村
　【トレース】　市森
　【執筆・編集】第１章～第３章　西村、付章　原田昌則

本　文　目　次

第１章 はじめに …… 93
第２章 調査概要 …… 94
　第１節　調査の方法と経過 …… 94
　第２節　基本層序 …… 95
　第３節　検出遺構と出土遺物 …… 95
　　１）　検出遺構 …… 95
　　２）　遺構に伴わない出土遺物 …… 100
第３章 まとめ …… 100
付章　老原「五条宮寺」周辺 …… 101

挿 図 目 次

第1図　調査地周辺図 …… 93
第2図　地区割り図 …… 94
第3図　平面図・地層断面図 …… 96
第4図　ＳＫ101出土遺物実測図 …… 97
第5図　ＳＤ101、ＳＤ102出土遺物実測図 …… 98
第6図　ＳＤ103～105、第4層、第5層出土遺物実測図 …… 99

図 版 目 次

図版一　調査地周辺　掘削状況　調査状況　南区全景　北区全景　南区東壁面
図版二　ＳＫ101、ＳＤ102、ＳＤ103出土遺物

第１章　はじめに

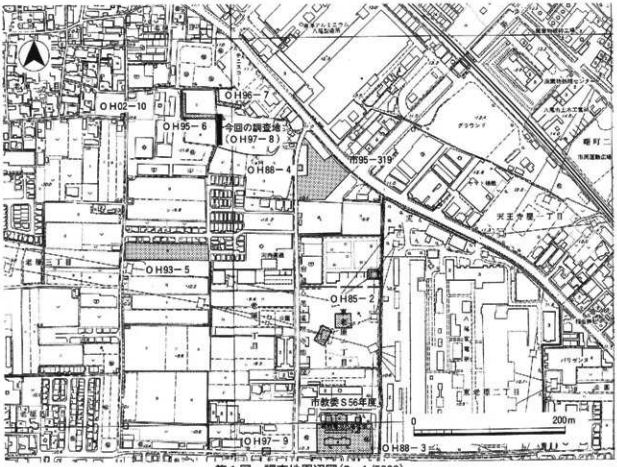
老原遺跡は、八尾市の南部に位置する老原１・２丁目、東老原１丁目に広がる古墳時代後期から室町時代に至る複合遺跡である。地理的には、旧大和川の主流であった長瀬川左岸一帯に広がる沖積地上に位置している。

当遺跡周辺には、南に志紀遺跡・田井中遺跡、さらに長瀬川を挟んで東に東弓削遺跡、北に矢作遺跡、北東に中田遺跡が存在している。

当遺跡内においては、昭和56年度に東老原１丁目で八尾市教育委員会（以下市教委）が発掘調査を実施しており、昭和60年度以降は財団法人八尾市文化財調査研究会（以下研究会）により７次におよぶ発掘調査が実施されている。これらの調査では、古墳時代後期から室町時代に比定される遺構・遺物が検出されている。

また、本調査地点の東50m地点には「五条宮」と称される場所があり、付近からは奈良時代後期の軒丸瓦が出土したことが報告されており、この付近を中心に寺院等の建築物の存在が想定されている。

今回の調査地に北接する地点で行った当研究会第７次調査（ＯＨ96－７）では、平安時代後期の屋瓦類が出土しており、奈良時代後期段階における状況は依然不明ながら、少なくとも平安時代後期段階においては屋瓦を使用した建物がこの付近に存在したことが明らかになった。



第１図　調査地周辺図（S=1/5000）

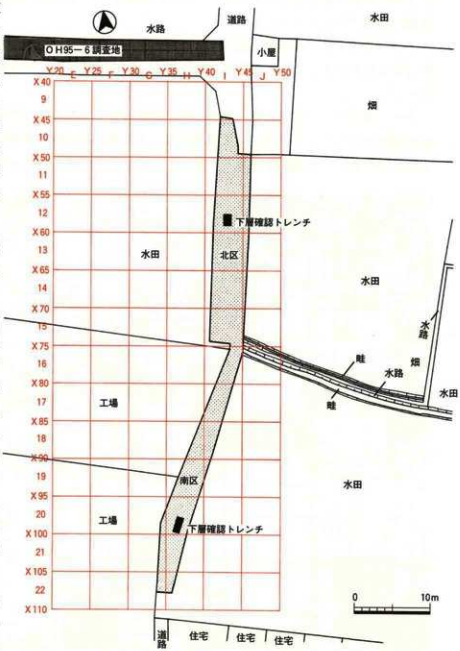
第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の調査は平成８年度に実施した第７次調査(本書掲載)と同様、道路新設工事に伴う発掘調査である。新設道路予定地に幅約3.9m、長さ約64m(面積約250㎡)の調査区を設定した。なお、調査予定地内には既存の工場があり、この部分の約30㎡は掘削できなかったため、調査は行っていない。したがって実際調査を行った面積は約220㎡である。

調査地の地区割りについては、平成７年度に実施した第６次調査(ＯＨ95－６)と平成８年度に実施した第７次調査(ＯＨ96－７)の調査基準点を踏襲する形を取った。第６次調査地の北西隅を基点(Ｘ０・Ｙ０)として東西80m、南北110mにわたって設定した。一区画の単位は５m四方で、東西方向はアルファベット(西からＡ～Ｐ)、南北方向は算用数字(北から１～22)で示し、地区の表示は１Ａ区～22Ｐ区と呼称した。地点の表示には、東西線(Ｘ０～Ｘ110)・南北線(Ｙ０～Ｙ80)の交点の数値を使用した。なお、今回の調査地は、地区割りの中の９～22　Ｇ～Ｊ区の範囲に位置している。掘削に際しては、現地表(T.P.＋9.0～9.3m)下約1.0m前後までを機械掘削した後、以下0.2～0.3mについては人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、現地表下1.2～1.4m(T.P.＋8.0～8.2m)に存在する第５層上面で平安時代後期～江戸時代に至る遺構を検出した。遺物は遺構および第４層・第５層からコンテナ箱約１箱分出土した。



第２図　地区割り図(S=1/500)

第2節　基本層序

第0層　N2/0黒色シルト混粘土。層厚0.4m。現地表面の標高T.P.＋9.0～9.3m。
第1層　2.5Y5/4黄褐色細粒砂混粘土。層厚0.3m。
第2層　10YR4/1褐灰色細粒砂混粘土。層厚0.2m。
第3層　10YR5/6黄褐色粗粒砂混粘土。層厚0.2m。
第4層　2.5Y4/1黄灰色細粒砂とシルト混粘土。層厚0.2m。
室町時代以降の整地層と思われる。層内からは平安時代後期と室町時代以降の瓦および土師器の破片が少量出土した。
第5－a層　10GY5/1緑灰色粘土質シルト。層厚0.3m以上。
第5－b層　N6/0灰色粗粒砂。層厚0.4m以上。
第5－c層　2.5GY6/1オリーブ灰色細粒砂。層厚0.4m以上。
第5－d層　7.5GY6/1緑灰色シルト混細粒砂。層厚0.4m以上。
第5-a～d層 上面の標高はT.P.＋8.0m～8.2m。上面で調査を行い平安時代後期～江戸時代の遺構を検出した。
第6層　10BG5/1青灰色シルト混細粒砂。層厚0.2m。
第7層　5B5/1青灰色シルト混粘土。層厚0.2m。
第8層　5B6/1青灰色シルト混細粒砂。層厚0.1m。
第9層　5PB3/1暗青灰色粘土。層厚0.1m以上。

第3節　検出遺構と出土遺物

1）検出遺構

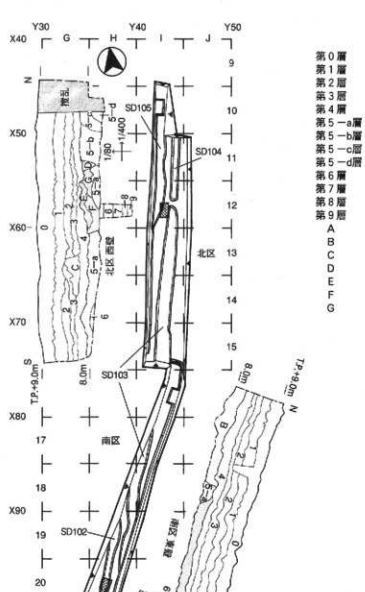
第5-a～d層の上面で調査を行った結果、平安時代後期の土坑1基(ＳＫ101)・溝1条(ＳＤ101)、鎌倉時代～江戸時代の溝4条(ＳＤ102～ＳＤ105)を検出した。

ＳＫ101

21Ｇ・Ｈ地区で検出した。平面形状は東西方向に長い楕円形である。長径1.5m、短径1.1mを測り、深さは0.4mである。埋土は上からN4/0灰色粘土、N3/0暗灰色粗砂混粘土、5B4/1暗青灰色シルト混粘土で、内部からは黒色土器、瓦器、土師器の破片が少量出土した。このうち図化し記載したものは黒色土器(1)、瓦器椀(2～6)、瓦器小皿(7)、瓦質鉢(8)、土師器小皿(9～11)である。1は内面が黒く、断面三角形の高台が付く。2は口縁内面に沈線を施し、内外面丁寧にミガキをヨコ方向に施す。3は内外面丁寧にミガキを施している。4は外面にミガキを施すが粗雑ある。5は断面逆台形の高台が付く。体部内面横方向のミガキ、見込みにはミガキを平行線状に施す。外面は口縁部と体部の境に沈線が1条巡る。体部はナデており、部分的に沈線を施す。6は「ハ」の字に開く高台部で、見込み部に斜格子の暗文を施す。7は見込み部に斜格子の暗文を施す。9・10は「て」の字状口縁を呈す。11は外面に指圧痕が残る。この遺構は平安時代後期に比定できる。

ＳＤ101

21･22Ｇ･Ｈ地区で検出した。南北方向に伸びる溝で、検出長3.0m、幅0.25m、深さ0.1mを測る。埋土は上から10BG2/1青黒色粘土、5B4/1暗青灰色シルト混粘土で、内部からは瓦器、土師器の破片が少量出土した。このうち図化し記載したものは瓦器椀(12・13)、土師器皿(14・15)であ



第3図　平面図・地層断面図(平面1/400・断面縦1/80横1/400)

ある。12は口縁内面に沈線を施し、内外面共密に細かいミガキを横方向に施す。13は内外面共にミガキを施す。14は内外面共に指圧痕が残る。15は「て」の字状口縁を呈す。この遺構は平安時代後期に比定できる。

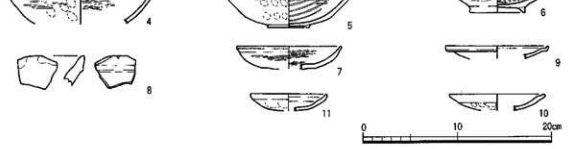
SD102

19～21日地区で検出した。南西－北東方向に伸びる溝で、検出長11m、幅0.5～1.0m、深さ0.1mを測る。埋土は上から10Y3/1オリーブ黒色細砂混粘土、10Y4/1灰色シルト混粘土で、内部

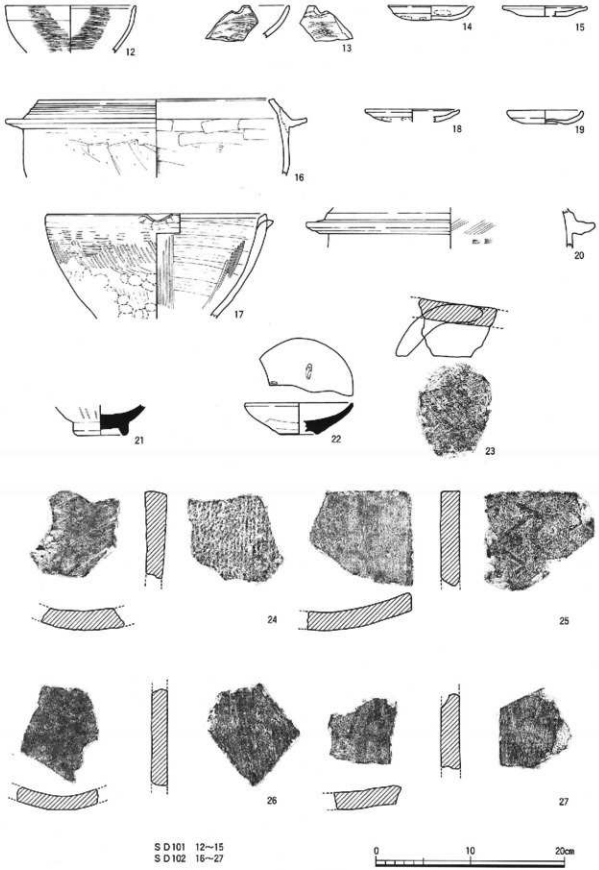
からは土師器、瓦質土器、陶器、瓦の破片が少量出土している。このうち図化し記載したものは瓦質羽釜(16)、瓦質すり鉢(17)、土師器皿(18・19)、土師器羽釜(20)、青磁碗(21)、唐津焼皿(22)、瓦(23～27)である。16の口縁部外面には強いヨコナデによる凹線のくぼみがある。内面ハケ、外面ケズリを施す。17は口縁部に注ぎ口が1箇所ある。内面は横方向の板状工具によるナデで、見込みから口縁部へ放射状に櫛目を施す。外面は左上がりの櫛目のちナデ。口縁部外面には横方向に櫛目を施したのち強くヨコナデする。18は「て」の字状口縁である。19の底部は上げ底である。20は内面ハケを施す。21は「ハ」の字に開く高台部で、釉は体部内外面と高台内面に塗布する。22は内面に胎土目があり、16世紀末頃に比定できる。23は丸瓦で凹面布目痕が残るが、消すように板状工具によるナデを施す。凸面縦方向に板状工具によるナデを施す。24は凹面布目の後斜方向にヘラ状工具によるナデ。凸面縄目を施す。25は凹面布目痕をすり消すように板状工具によるナデを施す。凸面ナデ。26は凹面横方向のヘラ状工具によるナデ。凸面縦方向にヘラ状工具によるナデ。27は凹面ナデ。全体的に煤が付着する。凸面縦方向にヘラ状工具によるナデを施す。この遺構は鎌倉時代～江戸時代に比定できる。

SD103

12～20H・I地区で検出した。南西－北東方向に伸びる溝で、検出長38.5m、幅1.1～1.5m、深さ0.2～0.3mを測る。埋土は10Y3/1オリーブ黒色細砂混粘土で、内部からは土師器、瓦器、瓦質土器、瓦の破片が少量出土した。このうち図化し掲載したものは瓦器椀(28)、瓦質羽釜(29)、瓦質鉢(30)、土師器皿(31)、土師器鉢(32)、瓦(33・34)である。28の口縁端部は丸く終わり、内面に1条沈線を施す。内外面密なミガキを横方向に施す。29の端部は尖りぎみに丸く終わる。鍔部は水平に伸び、端部は丸く終わる。内面口縁部ヨコナデ。外面強いヨコナデによる凹線状のくぼみがある。体部外面横方向のケズリ。30の口縁部は面をもつ。内面ナデ後見込みから口縁部へ放射状に櫛目(7本/cm)を施す。外面ナデ。31の端部は尖りぎみに丸く終わる。内面ナデ。外面口縁部ナデを施し、体部に指圧痕が残る。32は内面ナデ、外面縦方向の粗いハケナデ(3本/cm)を施し、指圧痕が残る。33の凹面は布目を縦方向のヘラ状工具によるナデによりすり消している。凸面は縄目を縦方向のヘラ状工具によるナデによりすり消している。34は凹凸面ともにヘラ状工具によるナデを施す。この遺構は鎌倉時代～室町時代に比定できる。



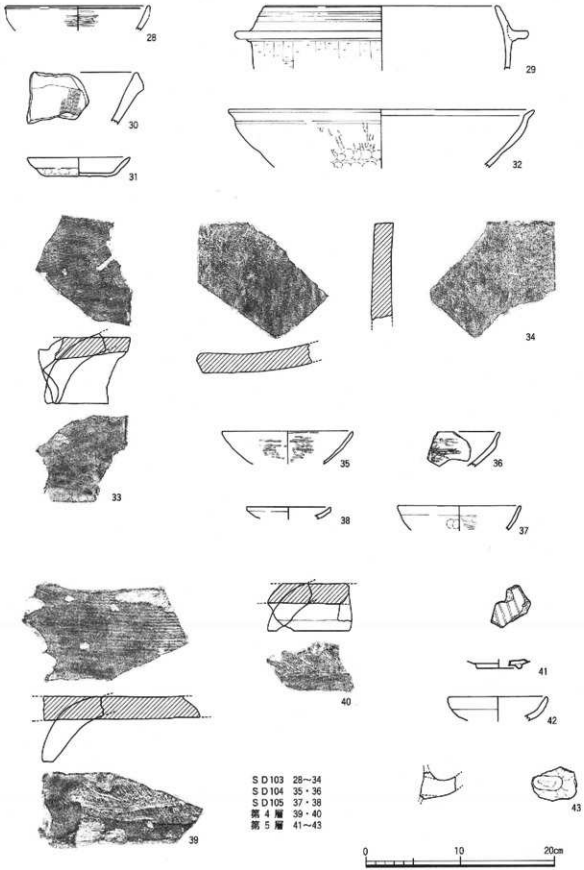
第4図　SK101出土遺物実測図(S=1/4)



SD101　12～15
SD102　16～27

0　10　20cm

第5図　SD101、SD102出土遺物実測図（S＝1/4）



第６図　ＳＤ103～105、第４層、第５層出土遺物実測図（Ｓ＝1/4）

SD104

11·12Ⅰ地区で検出した。南西－北東方向に伸びる溝で、検出長12.5m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。埋土はN4/0灰色細砂混粘土で、内部からは瓦器の破片が少量出土した。このうち図化し掲載したものは瓦器椀(35・36)である。35は内面横方向のミガキのち平行線状のミガキ、外面横方向のミガキを施す。36は内面平行線状のち横方向のミガキ、外面ナデを施す。この遺構は鎌倉時代～室町時代に比定できる。

SD105

10～12Ⅰ区で検出した。南西－北東方向に伸びる溝で、検出長10m、幅1.0m以上、深さ0.25mを測る。埋土は上から10YR5/6黄褐色細砂混粘土、10YR4/1褐色細砂混粘土、N4/0灰色粘土、N3/0暗灰色シルト混粘土、5B3/1暗青灰色粘土で、内部からは土師器、瓦器の破片が少量出土した。このうち図化し掲載したものは瓦器椀(37)、土師器皿(38)である。37は体部内面に横方向のミガキを施す。38は内外面ナデを施す。この遺構は鎌倉時代～室町時代に比定できる。

2）遺構に伴わない出土遺物

第4層からは瓦の破片が少量出土した。このうち図化し記載したものは(39・40)である。39は凹面布目、凸面縄目を施す。40は凹面布目、凸面板状工具によるナデを施す。

第5層からは土師器、瓦器の破片が少量出土した。このうち図化し記載したものは瓦器椀(41)土師器皿(42)、土師器鍋(43)である。41の高台は「ハ」の字にひらき、断面は逆台形である。見込みにミガキを平行線状に施す。42は内外面ナデを施す。43は外上方へ曲がりながら伸びる把手部。内外面ナデを施す。

第3章　まとめ

今回の調査では、平安時代後期と鎌倉時代～江戸時代の遺構を検出した。

平安時代後期の遺構は、北に接している第7次調査（ＯＨ96－7）でも検出している。また、今回の調査地では同時期と思われる瓦器が土坑から出土していることや、同時期と思われる瓦が第4層内から出土していることから、今回の調査地にも同時代の集落が存在していたと思われる。

また、鎌倉時代～江戸時代の遺構についても、第6次調査（ＯＨ95－6）で検出していることや、今回の調査地では南西－北東方向に伸びる溝を検出していることから、同時代の集落域が存在していたと思われる。

参考文献
・高萩千秋　1994年「8.老原遺跡第5次調査（OH93－05）」『平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原口昌則　1996年「5.老原遺跡第6次調査（OH95－06）」『平成7年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原口昌則　1997年「6.老原遺跡第7次調査（OH96－07）」『平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会

付章　老原「五条宮寺」周辺

1）「五条宮寺」について

「五条宮寺」についての記載は『八尾市史』[1]（昭和33年11月刊行）による「奈良街道から分かれて田井中に行く分岐点のすぐ西南の畑の中に、小さな森と祠がある。里人これを五条宮とよんでいる。この付近から奈良時代の古瓦が発掘されている。この寺の名は伝わっていないので、五条宮寺とよぶことにする。（以下略）」との簡単な記述が嚆矢である。昭和52年３月に刊行された『八尾市史　文化財編』[2]においては五條宮古瓦として八尾市田井中２丁目の安伝寺（安傳寺）所蔵の細弁蓮華文軒丸瓦（奈良時代後期）の写真が掲載されており、『八尾市史』に記された奈良時代の古瓦がこれに該当するものと理解される。さらに、昭和63年10月刊行の『増補版　八尾市史（前近代）本文編』[3]では、遺跡名称を老原廃寺（五条廃寺・五条宮跡）として記述されており、老原１丁目地内の田地内にある一辺約５m、高さ約１mを測る方形の高まりを中心として展開したものと推定され、付近から出土した屋瓦やこの高まり付近に「宮後」「北垣内」などの小字名があることが記されている。

このように、老原１丁目付近の田中に存在する方形の高まりを中心として、奈良時代後期の軒丸瓦の存在や「宮後」「宮南方」「五条垣内」「大門」「門田」等の小字名から寺院ならびにそれらに関連した建物等が当地に存在したことが想定されてきた。

「五条宮寺」の位置する八尾市老原一帯は『和名類聚抄』による志紀郡の北東部にあたる。地理的には、旧大和川の主流である長瀬川の左岸に位置し、地域の北部を奈良街道（亀瀬街道）が南東－北西方向にのびている他、村の東部では八尾と旧大和川以南の古市を結ぶ街道が通っている。一帯は条里制による一町四方の耕地区画がよく残っている地域で、江戸時代には志紀郡に属していたが、老原５丁目の浄土真宗本願寺派盛光寺所蔵の「親鸞上人絵像裏書」[4]に「天文七年（1538）戊戌十二月十一日河内国渋川郡老原盛光寺什物」とあることから、老原の北部が渋川郡との境を接しているため、時代により幾分かの変化があったと推定される。また老原村の南に位置する田井中村は、伝承によると五条田井中村の古称があり、かつて「五条宮寺」があった付近に村があったが、中世、大和川の洪水で南の現在地へ移ったとされている。万治三年（1660）の老原村免状（山本家文書）[5]には老原村が東老原、南老原、西老原、五条の四村に分かれていたことが記されており、「五条村」については五条田井中村の廃村後に新しくできた小村であった可能性が高い。なお、天保八年（1837）の大塩平八郎の乱のとき、大塩父子と東組同心渡辺良左衛門は老原村まで落ちのびたが、渡辺良左衛門は「五条宮」[6]で自刀したとされていることから、少なくとも江戸時代後期にはこの付近がこのような名称で呼ばれていたのであろう。

五条宮寺周辺（西から）

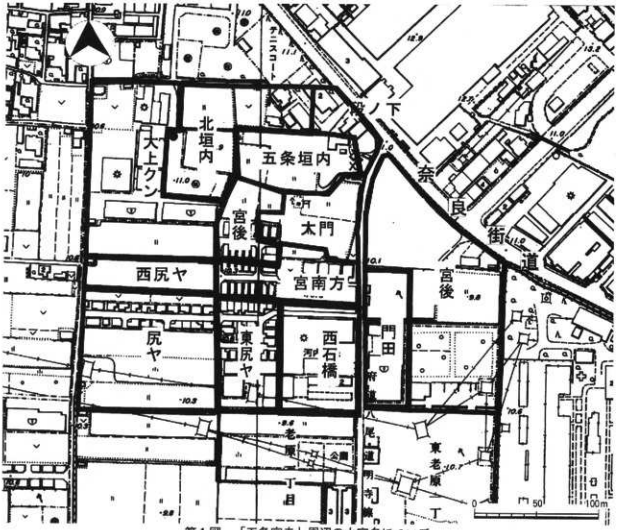
2）小字名からみた「五条宮寺」について

第１図で「五条宮寺」周辺の小字名を示した。明治19年10月作成の地籍図[7]を使用して作成したもので、一町方格地割りの耕地形態が長地型

を主体とするなかで、「五条宮寺」周辺の小字は複雑に入り組んでいる。「五条垣内」を中心として東に「宮後」、南に「大門」「宮南方」「宮後」、西に「大上クン」、西から北にかけて「北垣内」、北に「段ノ下」がある。「五条垣内」「北垣内」のかいと垣内については、近畿地方特有の言いまわしで、他地域では「堀の内」であらわされている。中世の近畿地方は長期の争乱状態であったため、屋敷地を囲む防御施設として堀の存在が必要不可欠で、垣内型集落と呼称される環濠集落が各地で成立しており、その中核を成す部分が「垣内」と呼ばれている。「大門」については「五条垣内」に付随した門の位置を示すものと考えられる。「大門」の東西に位置する「宮後」、南に位置する「宮南方」の小字は「宮」の字を冠するもので、神社が鎮座していた事を重んじたことによる小字名と考えられる。「大門」の小字区画内に位置する方形の高まりを神社の名残と推定すれば、周辺の小字名と符合することがわかる。

3）既往調査と「五条宮寺」について

「五条宮寺」が位置する老原遺跡の北東部周辺では、昭和56年度に八尾市教育委員会が実施した老原1丁目42番地の調査を皮切りとして、これまでに大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、(財)八尾市文化財調査研究会による多事にわたる発掘調査が実施されてきた。その結果、古墳時代後期、平安時代後期、平安時代末期、鎌倉時代前期、室町時代中期の遺構・遺物が検出されてい



第1図　「五条宮寺」周辺の小字名について

る。しかしながら、これまでに出土が報じられてきた細弁蓮華文軒丸瓦（奈良時代後期）に対応する時期の遺構・遺物は現時点では確認されていない。このように奈良時代後期については不明確であるが、出土瓦の存在から奈良時代後期を1期とし、以下、平安時代後期を2期、平安時代末期を3期、鎌倉時代前期を4期、室町時代中～後期を5期に区別して「五条宮寺」周辺での各時期の推移を考えてみたい。

1期[奈良時代後期（8世紀後半～9世紀前半）]

これまでに報じられている細弁蓮華文軒丸瓦（奈良時代後期）が唯一の遺物である。周辺の調査では一様に、平安時代後期以前の地層は細粒砂～粗粒砂が優勢な水成層の堆積がみられ、それより下部の調査が面的に実施されていないため、下層に当該期の生活面が存在する可能性も否定できない。

2期[平安時代後期（11世紀後半～12世紀前半）]

第4次調査、第6次調査、第7次調査地を中心に分布しており、北に隣接し東西方向にはしる奈良街道（亀瀬街道）に面して成立した集落であったと考えられる。現時点では東西約180m、南北約120mの範囲で遺構が検出されている。第6次調査では複弁8弁蓮華文軒丸瓦（P74　第14図－75）、第7次調査では唐草文軒平瓦（P89　第12図－52）が出土しており、付近に屋瓦を用いた建物の存在が想定される。

3期[平安時代末期（12世紀中～12世紀後半）]

当該期の遺構は前代に比して拡大傾向が顕著で、第6次調査、第7次調査および東では市教委平成7年（95－319）調査、南では第5次調査、市教委昭和56年調査で検出されており、現時点では東西約300m、南北約420mの範囲で遺構が検出されている。第7次調査では花菱文軒平瓦（P90　第13図－71）が出土しており、継続して付近に屋瓦を用いた建物の存在が想定される。

4期[鎌倉時代前期（12世紀末～13世紀中葉）]

第2次調査、第6次調査、第7次調査で検出されており、居住域は前代と重複するが、分布範囲はやや縮小している。第7次調査では巴文軒丸瓦（P90　第13図－70）が出土しており、前代より継続する遺物の存在が想定される。4期後半の13世紀中葉以降は集落が廃絶しており、この付近が伝承による五条田井中村であった可能性がある。ただ、この付近での調査では4期面より上部で洪水砂の堆積が確認された例が無いため懐疑的であり全面的には首肯し難い。

5期[室町時代中～後期（15世紀前半～16世紀後半）]

当該期の遺構は第6次調査、第7次調査で溝を中心とした遺構が検出されている。特に第6次調査の西部で検出されたＳＤ－7ならび第7調査区の北部で検出されたＳＤ－19は規模の大きい溝である。6次調査のＳＤ－7が南北方向、第7次調査のＳＤ－19は東西方向に伸びるが、両溝が屋敷地を囲繞する堀的な役割を果たしたものとすれば小字「北垣内」の西側および北側を区画する溝であったと推定される。室町時代～戦国時代の河内地方は、南北朝期の動乱、畠山氏の内乱に端を発する応仁の乱から戦国時代末期の織田信長の近畿統一に至る約240年の長きに亘って戦乱の渦中であった。当該期の集落の多くは村落全体を囲む防御施設として堀を設けた環濠集落を形成している。なお『新版八尾の史跡』では「五条宮址」の記述の中で、「元亀三年（1572）頃、三好、畠山の確執から、三好方はここに城を構え、山中彦太郎、赤沢甚六らをして守らせたので、これを斡旋するため、南部一乗院などから宥め役として川堤から舟に乗ろうとしたが城中

から4、50人打って出、田井中の杜、用明天皇の陵の下に休息しつつ、談合したがかなわず、ついに帰ったことがある」と記されており「五条宮」付近がその城の所在地であったとされている。

以上から「五条宮寺」に関連した建物については、出土した屋瓦からみて、奈良時代後半に建立され廃絶した後、平安時代後期に再建されて以降、室町時代前期までは存続したようである。さらに小字名に「宮」の字を冠することから、それらの建物の性格としては神社に付随した神宮寺的な様相が強いものであったと推察される。1～4期においてはこのように、寺社建物を中核とする集落構成により推移したことが推定される。ただし、周辺集落が廃絶した鎌倉時代前期末（13世紀中葉）以降の屋瓦が出土していることから、寺社建物としては存続したのであろう。5期とした室町時代中期～後期（15世紀前半～16世紀後半）には当該期の趨勢のなかで、「五条宮寺」を中心として環濠集落化が図られている。その背景には、北に旧大和川・奈良街道（亀瀬街道）ならびにそこから南の古市を結ぶ街道を中心とした交通至便な位置にあることの他、「五条宮寺」を取り込む形の集落を形成することにより、集団内の結束や神仏庇護的な精神文化が働いたためであろうと推察される。明治19年の地籍図によれば、小字「大門」の南半分（東西約70m、南北20～30m）が山林としての地目で表記されており、現在、田中に残る方形の高まりはその一部であったと推定される。このように、小字「大門」の南半分については、明治期の前半まで「鎮守の森」としての景観を残していたのであろう。

註記

註1　西岡三四郎　1988「第二章　古代の八尾　第六節　上代の伝説と信仰　三、廃寺址　A大和川沿岸の寺院址　四、五条宮寺」『八尾市史』大阪府八尾市役所

註2　西岡三四郎　1977「一、考古出土品　五條宮古瓦」『八尾市史　文化財編』八尾市役所

註3　吉岡　哲　1988「第五章　歴史考古学からみた八尾　第三節　平野部の古代寺院と行宮跡　(5) 老原廃寺（五条廃寺・五条宮寺跡)」『増補改八尾市史（前近代編)』八尾市役所

註4　八尾市役所　1960『八尾市史』史料編

註5　棚橋利光　1982「八尾市紀要　第6号」『八尾の条里制』八尾市市史編さん室

註6　棚橋利光　1987「11. 志紀　3. 五条宮址」『新版八尾の史跡』八尾市市長公室広報課

註7　志紀郡老原村地籍図（明治19年10月）八尾法務局蔵　　山本荘五郎　山本左太郎　林繁作　大橋重治郎　清水政太郎の各地主惣代名あり。

註8　武光　誠　1999「4　武家社会のありさまが地名から浮かび上がる　武家屋敷があったことにちなむ地名」『地名から歴史を読む方法』KAWADE夢新書

註9　前掲註6

図　　版

調査地周辺(南から)

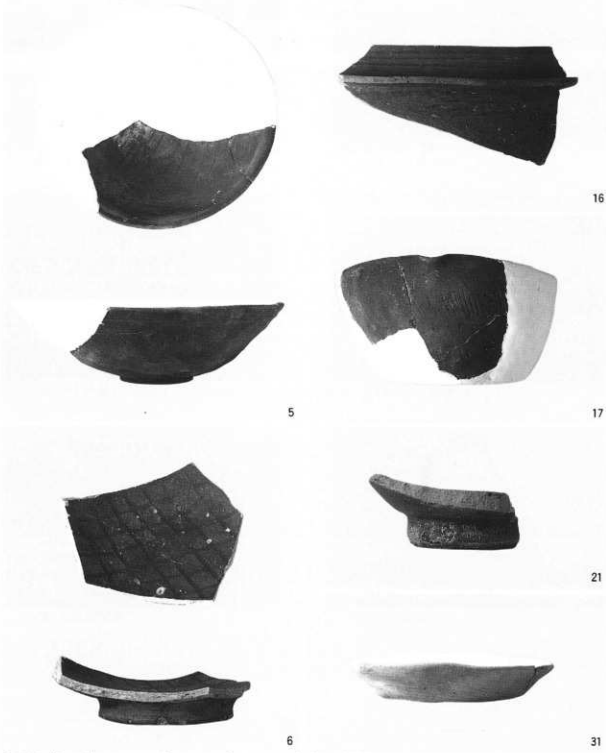
掘削状況(南から)

調査状況(南東から)

南区全景(北から)

北区全景(北から)

南区東壁面(西から)



S K101（5・6）、S D102（16・17・21）、S D103（31）出土遺物

Ⅵ　中田遺跡第10次調査（ＮＴ92－10）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市八尾木北３丁目地内で行った楠根川改修に伴う発掘調査の報告書である。
1．本書で報告する中田遺跡第10次調査（ＮＴ92－10）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第110号　平成４年10月７日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は平成４年10月26日から平成５年１月22日（実働25日間）にかけて原田昌則を担当者として実施した。面積約370㎡を測る。
　現地調査においては、井上靖啓・垣内洋平・福島友香が参加した。
1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成16年９月30日に完了した。
1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－岸田靖子・北原清子・沢村妙子、遺構・遺物トレース－北原・山内千恵子、遺物写真撮影－原田が行った。
1．本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 105
第２章　調査概要 …… 106
　第１節　調査の方法と経過 …… 106
　第２節　基本層序 …… 110
　第３節　検出遺構と出土遺物 …… 110
　　１）検出遺構 …… 110
　　２）遺構に伴わない出土遺物 …… 123
第３章　まとめ …… 126

挿 図 目 次

第１図　調査地周辺図 …… 105
第２図　調査区設定図 …… 106
第３図　１～４区平断面図および２・３区東壁断面図 …… 107・108
第４図　５・６区平断面図および５区東壁断面図 …… 109
第５図　１・２区　ＳＤ－１平断面図 …… 111
第６図　ＳＤ－１出土遺物実測図―１ …… 113
第７図　ＳＤ－１出土遺物実測図―２ …… 114
第８図　ＳＤ－１出土遺物実測図―３ …… 115
第９図　ＳＫ－１平断面図 …… 117
第10図　ＳＫ－１出土遺物実測図 …… 118
第11図　ＳＤ－２出土遺物実測図 …… 119
第12図　ＳＤ－３出土遺物実測図 …… 120
第13図　ＳＤ－５平断面図 …… 121
第14図　ＳＤ－５出土遺物実測図 …… 122
第15図　ＳＫ－３出土遺物実測図 …… 122
第16図　第４層出土遺物実測図 …… 123
第17図　第３層出土遺物実測図 …… 125
第18図　第10・11層出土遺物実測図 …… 125

写 真 目 次

写真１　ＳＥ－１検出状況 …… 116

図 版 目 次

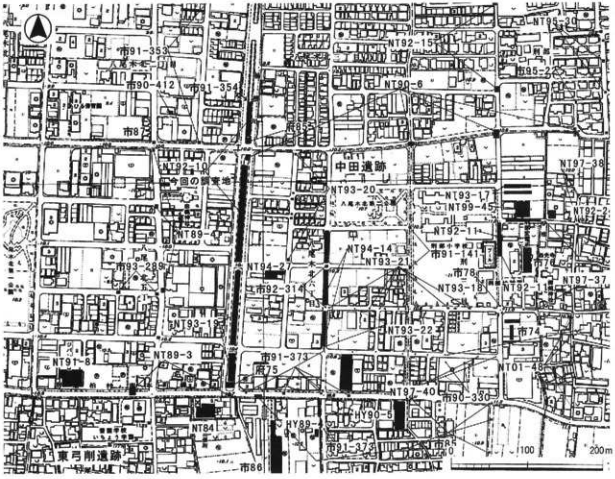
図版一　１区全景
　　１区ＳＤ－１検出状況
図版二　２区全景
　　２区全景
図版三　２区ＳＤ－１検出状況
　　２区ＳＫ－１検出状況
図版六　５区全景
　　５区ＳＫ－３、ＳＰ－７～10検出状況
図版七　６区全景
　　２区調査風景
図版八　ＳＤ－１出土遺物
図版九　ＳＤ－１出土遺物

2区SK－2、SP－3・4
検出状況
図版四　3区全景
3区SD－3・4、SP－5・6、
検出状況
図版五　4区全景
4区SD－5検出状況
図版一〇　SD－1出土遺物
図版一一　SD－1、SK－1出土遺物
図版一二　SD－3、第4層、第3層、
第10・11層出土遺物

第１章　はじめに

中田遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置する遺跡で、現在の行政区画では中田１～５丁目、刑部１～４丁目、八尾木北１～６丁目の東西1.0km、南北0.9kmがその範囲とされている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉櫛川の二大河川に挟まれた低位沖積地に位置している。遺跡周辺では、北側に小阪合遺跡、西側に矢作遺跡、南側に東弓削遺跡が隣接しており、低位沖積地である地理的条件に即応して弥生時代前期ならびに中期以降に成立する遺跡が多く、考古学的な資料の蓄積も多い。

当遺跡は昭和45年度に実施された区画整理事業の際発見された遺跡で、昭和47年以降は中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により発掘調査が継続して実施されており、弥生時代前期～近世に至る複合遺跡であることが確認されている。なお遺跡範囲のほぼ中央部を縦断して現楠根川が北流している。この楠根川の流路については、少なくとも弥生時代後期段階には成立していたことが想定でき、現流路より西側一帯に古楠根川の流域を求めることが可能である。中田遺跡では特に、古墳時代初頭（庄内式期）～前期（布留式期）において、古楠根川の両岸を中心に数多くの集落が成立しており、古楠根川が北



第１図　調査地周辺図

流する小阪合遺跡内においても同様の集落展開が認められている。

今回の発掘調査は、楠根川の改修工事に伴うもので、調査地点の北部では昭和60年に大阪府教育委員会[注3]、平成３年には当調査研究会が公共下水道工事に伴う発掘調査[注4]（ＮＴ91－６）を実施している。なお平成５年に実施した本調査の南部に続く第19次調査[注5]（ＮＴ93－19）では、家形・船形・朝顔形・円筒の埴輪類が多量に出土した４世紀後半の円墳と推定される中田古墳が検出されている。

第２章　調査概要

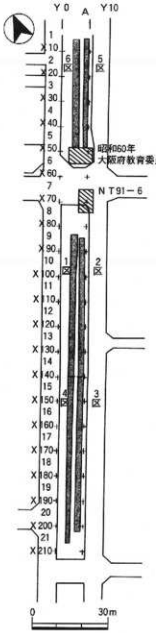
第１節　調査の方法と経過

今回の調査は楠根川の改修工事に伴うもので、楠根川両岸の法面部分の長さ延べ186.5m、幅１mを調査対象とした。調査にあたっては、工事との関係で調査地の北部を東西方向に伸びる道路を挟んで南区（上流側）と北区（下流側）に区別し、南区については平成４年10月26日～12月４日、北区については平成５年１月13日～１月22日にかけて発掘調査を実施した。

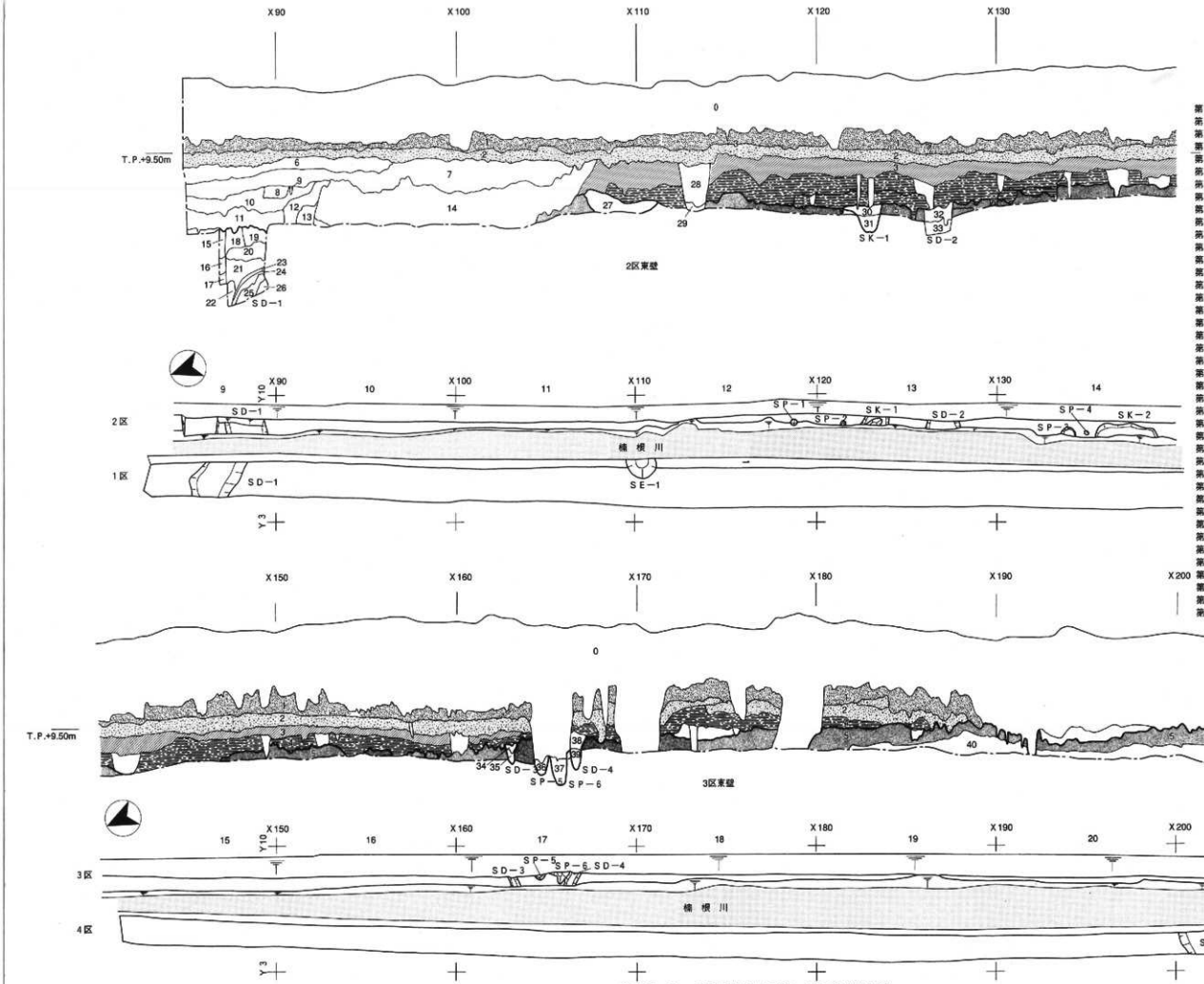
調査の地区割りは、調査地に沿って東西10m、南北210mにわたって設定した。一区画単位は10m四方で、東西はアルファベット（Ａ）、南北は算用数字（北から１～21）で示し、地区の表示は１Ａ地区～21Ａ地区と呼称した。地点の表示には、東西線（Ｘ０～Ｘ210）・南北線（Ｙ０～Ｙ10）の交点の数値を使用した。

調査区は、調査地を横断する道路で北区と南区に区別した。北区の調査では、右岸側を５区、左岸側を６区とした。南区の調査では、Ｘ140ラインを境に北側約60mと南側約70mに二分し、北側の左岸側を１区、右岸側を２区とし、南側の右岸側を３区、左岸側を４区とした。

調査では、楠根川の中央部に鋼矢板を南北方向に打設し、水流を振り分ける方法を取り１区～６区の順に調査を実施した。ただ、左岸部分にあたる１区・４区・６区については当初、調査対象地が楠根川の法面部分とされていたが、現地での測量においてはその大半が楠根川の河床部分にあたることが確認された。以上のことから、１区・４区・６区の調査では、河床に堆積している0.5m前後のヘドロを重機により排除した後、人力掘削、平面精査を実施した。右岸に位置する２区・３区・５区の調査では、１m前後を機械掘削した後、以下0.5m前後については層理にしたがって人力掘削を実施した。調査の結果、１区～５区で弥生時代後期末、古墳時代前期前半（布留式古相）、古墳時代中期、近世に比定される遺構、遺物を検出した。遺物は遺構内および包含層からコンテナ10箱程度が出土している。



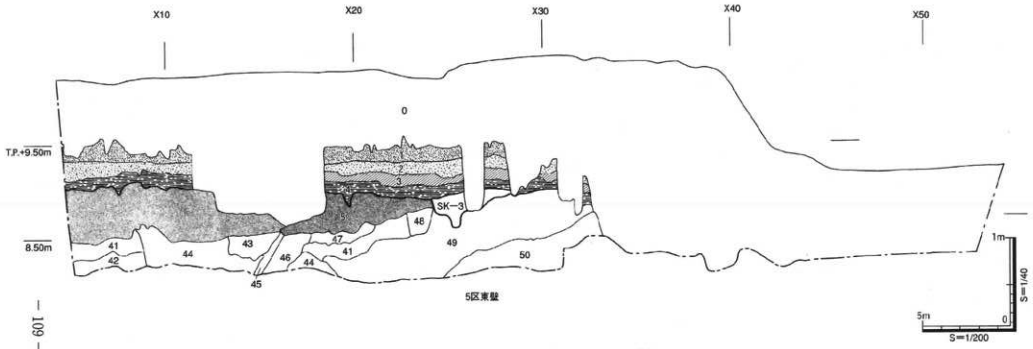
第２図　調査区設定図

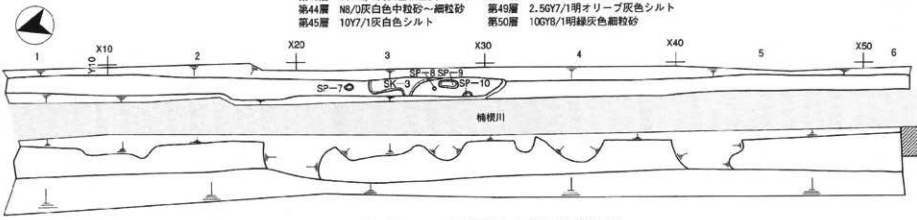


Ⅵ　中田遺跡第10次調査(ＮＴ92－10)

第０層	盛土
第１層	2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂
第２層	5Y7/3浅黄色極細粒砂
第３層	N6/0灰色極細粒砂
第４層	5GY7/1明オリーブ灰色極細粒砂
第５層	2.5Y7/1灰白色極細粒砂
第６層	2.5GY8/1灰白色極細粒砂
第７層	10YR7/1灰白色中粒砂～細礫
第８層	10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂
第９層	10YR7/4にぶい黄橙色細粒砂～中粒砂
第10層	N7/0灰白色シルト混粘土
第11層	5B7/1明青灰色粘土
第12層	10Y8/1灰白色細粒砂～中粒砂
第13層	N7/0灰白色シルト
第14層	10YR6/1褐灰色砂質シルト
第15層	5B4/1暗青灰色粘土
第16層	5BG7/1明青灰色粘土質シルト
第17層	N6/0灰色シルト
第18層	10BG7/1明青灰色シルト
第19層	10B6/1青灰色粘土質シルト
第20層	N6/0灰色シルト
第21層	N6/0灰色シルトにN3/0暗灰色シルトのブロック（遺物包含層）
第22層	10YR8/4浅黄橙色中粒砂～細粒砂
第23層	N3/0暗灰色粘土（植物遺体、炭を多量に含む）
第24層	10BG7/1明青灰色極細粒砂（植物遺体、炭を多量に含む）
第25層	N6/0灰色粘土（植物遺体、炭を多量に含む）
第26層	10BG7/1明青灰色粘土
第27層	7.5Y5/1灰色極細粒砂～細礫
第28層	2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルト
第29層	第28層にN8/0灰白色細粒砂のブロック
第30層	7.5Y6/1灰色極細粒砂 ｜SK−1
第31層	N6/0灰色極細粒砂 ｜SK−1
第32層	5YR4/4にぶい赤褐色細粒砂 ｜SD−2
第33層	5Y6/1灰色細粒砂～中粒砂 ｜SD−2
第34層	7.5Y6/1灰色極細粒砂 ｜SD−3
第35層	N7/0灰白色粘土質シルト ｜SD−3
第36層	5B6/1青灰色シルト（ＳＰ－５）
第37層	5B6/1青灰色シルト（ＳＰ－６）
第38層	2.5GY7/1明オリーブ灰色細粒砂 ｜SD−4
第39層	N5/0灰色極細粒砂 ｜SD−4
第40層	7.5GY7/1明オリーブ灰色シルト

第３図　１～４区平面図および２・３区東壁断面図





第4図　5・6区平面図および5区東壁断面図

第２節　基本層序

南北に延べ186.5mに及ぶ調査区の東壁部分で層序を確認した。第１層～第５層は比較的安定した層相であったが、以下は河川の氾濫に起因した水成層の堆積が顕著であった。ここでは、普遍的に存在した６層を摘出して基本層序とした。

第０層　盛土。層厚0.55～0.8m。上面の標高はT.P.＋10.3～10.5m。
第１層　旧作土。2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂。層厚0.1～0.2m。
第２層　床土。5Y7/3浅黄色極細粒砂。層厚0.15m前後。
第３層　N6/0灰色極細粒砂。層厚0.1～0.2m。古墳時代中期～後期の遺物を含む。
第４層　5GY7/1明オリーブ灰色極細粒砂。層厚0.1～0.3m。弥生時代後期末～古墳時代中期の遺物を含む。
第５層　2.5Y7/1灰白色極細粒砂。層厚0.1～0.3m。遺構検出面。

第３節　検出遺構と出土遺物

１）検出遺構

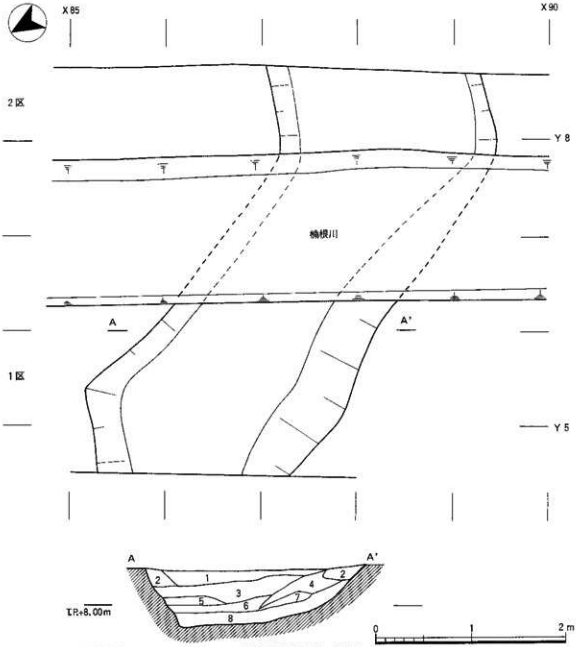
・１区

楠根川の河床に設定した調査区で、規模は東西２m前後、南北61mを測る。調査区が楠根川の河床にあたるため第５層の中位まで削平を受けていた。調査の結果、第５層中位（T.P.＋8.4m）で古墳時代前期前半（布留式古相）の溝１条（ＳＤ－１）と近世の井戸１基（ＳＥ－１）を検出した。

ＳＤ－１

１・２区北部の９Ａ地区で検出した。北西－南東に蛇行して伸びるもので、楠根川による削平部分を挟んで検出部分で検出長4.3m、幅2.2m前後を測る。深さについては、１区で0.55m、２区で0.85mを測るが、２区の東壁でＳＤ－１の上部を東西方向に伸びる鎌倉時代の溝の存在が想定でき、それにより上部の0.4m程度が削平を受けている。埋土は１区部分で８層に分層される。遺物は第１・３・４・６・８層から古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される土器類が多量出土している。総量はコンテナ３箱程度であるが、その大半が１区部分から出土している。総数で69点（１～69）の土器類を図化した。その内訳は壺20点（１～20）、鉢10点（21～30）、甕26点（31～56）、高杯４点（57～60）、小形器台８点（61～68）、大形器台１点（69）である。

１・２は口頸部が斜上方に直線的に伸びる精製の直口壺で、直口壺Ａ$_2$に分類される。口頸部のみの残存で、１が口径13.2cm、口頸部高6.9cm、２が口径15.8cm、口頸部高7.7cm測る。口頸部の器面調整は、内外面共に横位の密なヘラミガキの後、放射状にヘラミガキを施す。色調は赤褐色である。３～６は長胴で胴部の張りが少ない体部に、短めの口頸部が付く短頸壺Ａに分類される。５は完形に復元が可能で口径16.4cm、器高29.8cm、体部最大径22.7cmを測る。底部は平底で裏面中央部は大きく窪む。３～５の器面調整は外面では縦位のヘラミガキを多用し、内面では５の口縁部のヘラミガキを除けばナデによる調整が行われている。６については口縁端部が未成形で波状を成す。器面調整は外面口縁部が右上がりのハケ、体部が左上がりのタタキの後、右上がりのハケを全面に施す。内面は口縁部が横位のハケ、体部は上位がやや単位幅の大きい横位のハケ、中位以下はヘラケズリを行う。色調は３が灰白色、４・５が褐灰色、６が浅黄橙色である。７は

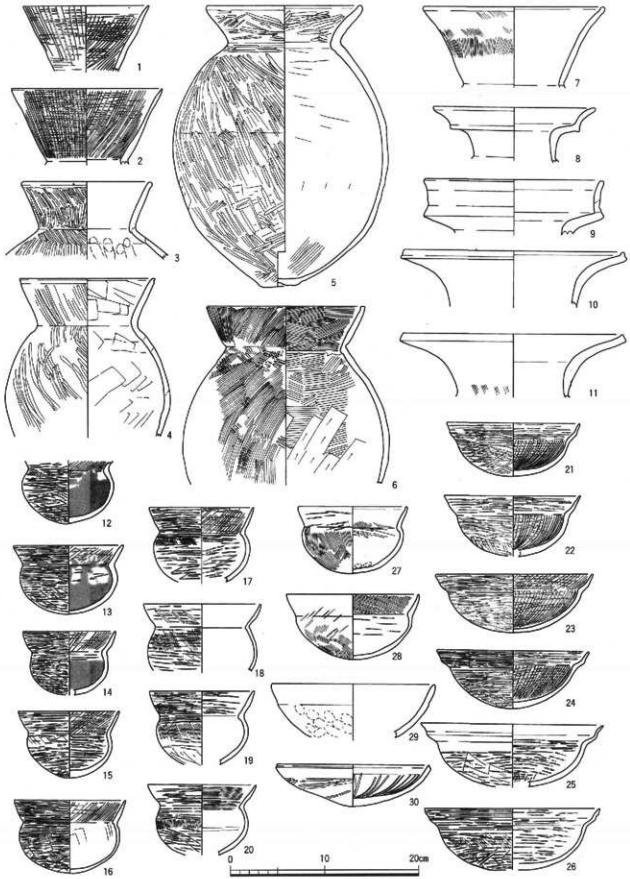


第５図　１・２区　ＳＤ－１平断面図

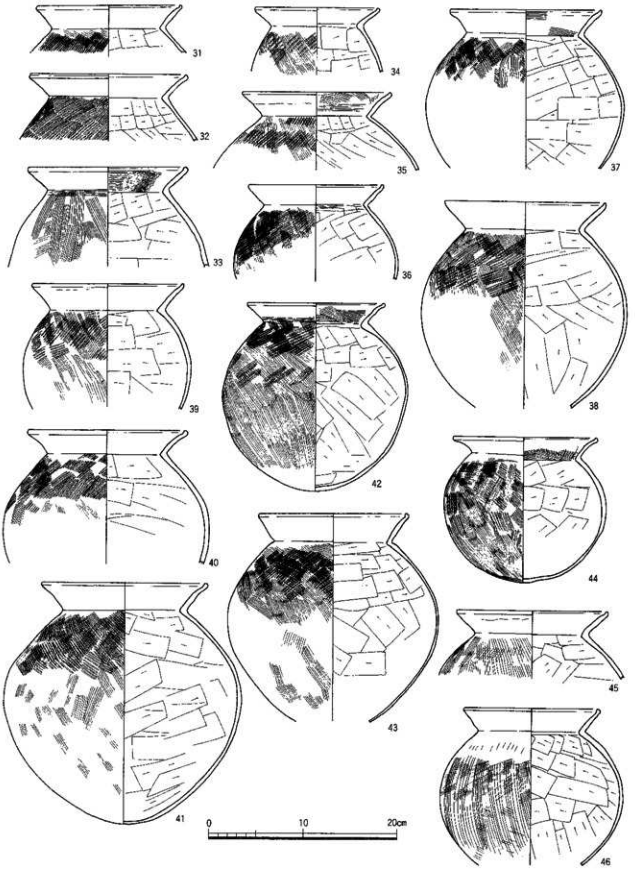
大形直口壺Ａである。復元口径19.1cmを測る。口頸部は斜上方へ外反気味に伸びるもので端部は内傾して小さく肥厚する。色調は褐灰色で角閃石を含む生駒西麓産である。８は頸部が直上に伸びる二重口縁壺（複合口縁壺Ｂ１）に分類される。口径17.0cm、頸部径8.7cmを測る。器面調整はヨコナデによるもので、全体に丁寧な作りである。色調は淡赤褐色。９は口縁部が直上に外反して伸びる厚手の複合口縁壺である。復元口径18.6cmを測る。器面調整はナデ。色調は赤褐色である。東四国系のものと推定される。10・11は口頸部が大きく外反して開くもので、口縁端部は外傾して幅広の面を作る。口径は共に23.4cmを測る。広口壺Ｄ３に分類されるもので東四国系である。k

器面調整は11の頸部外面に見られる縦位のハケを除けば、ナデを多用している。共に胎土は精良である。色調は赤褐色である。12～20は精製品の小形丸底壷である。全て口径が体部最大径を凌駕する型式で小形壷B_2にあたる。15・16が完形、その他1/2以上が残存している。口径9.7～12.3cm、器高6.7～7.7cm、体部最大径8.3～10.7cmを測る。このタイプの小形丸底壷の器面調整は、口縁部内外面においては横位の密なヘラミガキの後、内面にのみ放射状のヘラミガキを加えるものが大半を占める。体部外面においては、一次調整として下半を中心にヘラケズリにより平滑にした後、二次調整として横位にヘラミガキを施すものと、一次調整として下半にヘラケズリ、中位・上位にタテハケを施した後、二次調整として横位にヘラミガキを施すものがある。12～14は体部内面を中心に漆が付着しており、漆容器としての機能が想定される。21～26は半球形の体部に二段に屈曲する口縁部が付く精製の小形鉢である。鉢H_2に分類される。口径13.9～18.4cm、器高5.6～6.5cmを測る。23がほぼ完形である他は1/4～1/2程度が残存している。体底部外面がヘラケズリの他は、横位の密なヘラミガキを多用するもので、25・26以外は内面体部に放射状のヘラミガキを施す。色調は淡黄橙色～赤褐色である。27・28は半球形の体部に斜上方に短く内湾気味に伸びる口縁部が付く小形の鉢である。鉢H:に分類される。27は1/3、28は完形で口径13.9cm、器高6.9cmを測る。器面調整は体部外面およびL1縁部内面にハケを使用している。色調は灰白色。共にスコープにより角閃石の含有を認める。生駒西麓産。29は半球形の体部に直口の口縁部が付く小形の鉢である。復元口径17.3cmを測る。色調は淡灰色。30は小形鉢である。底部が尖り気味で終わる浅い椀形で、内傾する端面に一条の凹線が巡る。体部外面の上位以下はヘラケズリの後、幅広のミガキを横位に行っている。体部内面はナデの後、放射状ヘラミガキ。形態的には瀬戸内地域から北部九州の広範囲にかけて分布しており、河内地域では庄内式新相～布留式古相にかけて出土例があるが量的には僅少である。本例は角閃石を含む生駒西麓産で、色調は褐灰色である。

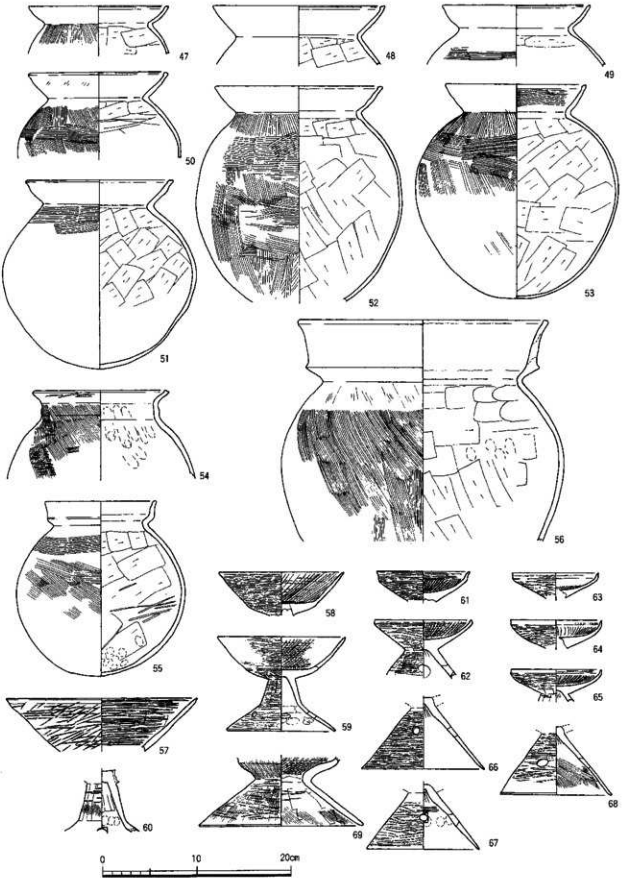
甕は26点（31～56）図化した。31～44は球形の体部に「く」の字に屈曲する口縁部が付く河内型庄内式甕である。体部上半に右上がりの細筋タタキを施した後、左上がりないしは垂直方向にハケ調整を施すもので、41～43のようにハケメが体部下半に及ぶものを除けば、ハケ調整はタタキが行われた体部中位付近で終わるものが大半を占めている。体部内面の器面調整はヘラケズリが多用されており、器壁は2～3㎜程度と薄い。ケズリの方向は下位から中位においては下方から上方に向かって施されるものが多く、上位については左から右方向に向かって削る指向のものが大半を占める。口縁部は42を除けば鋭く「く」の字に屈曲する形態のものが大半で、端部は内傾して小さな面を形成している。44は小形品で口径15.0cm、器高17.2cmを測る。色調は浅黄橙色～褐灰色。胎土中にスコープで確認できる角閃石を含有している。生駒西麓産。これらの庄内式甕は河内型庄内式甕の最終段階の形態で甕B_4に分類される。45・46は河内型庄内式甕の形態を維持するものの、体部外面のタタキ調整を欠き布留式甕の属性の一つである体部外面にハケによる調整を行う特徴を持つもので、布留式影響の庄内式甕に区分される甕Dにあたる。色調は45が灰白色、46が淡灰橙色である。共に非生駒西麓産である。47～53は球形の体部に口縁屈曲部の湾曲化と口縁端部の肥厚、さらには体部外面の器面調整がハケに画一化される等の諸属性を持つ布留式甕に分類される。色調は47・50・51が淡灰褐色、他は灰白色。胎土中にスコープにより角閃石の含有が認められるものは50・51で、他は非生駒西麓産である。体部の球形化、口縁端部の肥厚



第６図　ＳＤ－１出土遺物実測図－１



第７図　ＳＤ－１出土遺物実測図―２



第８図　ＳＤ－１出土遺物実測図－３